

山居遺跡

目 次

I 遺跡の位置.....	23
II 調査に至る経過と方法.....	23
III 発見された遺構と遺物.....	25
IV 考 察.....	58
V ま と め.....	66

調 査 要 項

遺 跡 名：山居遺跡（さんきょいせき）（宮城県遺跡地名表登載番号70033）

遺跡記号：RF

所 在 地：宮城県石巻市桃生町倉坪字山居

調査要因：三陸縦貫自動車道桃生登米道路建設

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：I 区 事前調査 平成17年6月7日～8月5日

II 区 確認調査 平成17年6月16日～6月20日

事前調査 平成17年7月11日～10月20日

調査対象面積：2,000m²

調査面積：1,500m² (I 区：200m² II 区1,300m²)

調査員 I 区 真山悟 後藤秀一 相原淳一 保原恒雄 田中政幸

II 区 後藤秀一 相原淳一 保原恒雄 豊村幸宏 佐藤恵幸 田中政幸

I 遺跡の位置

山居遺跡は、旧北上川沿いにある石巻市桃生町総合支所から北東へ約4km、桃生町東部を流れる新北上川によって分断された丘陵地帯の町内最北部の丘陵に位置している。この丘陵は東西2km、南北3kmで、町内の丘陵の中でも大型の丘陵である。この丘陵の最高地点は茶臼山で標高は154mである。山居遺跡はこの丘陵の一部をなす南西部に舌状に張り出した小丘陵地の南～西斜面上に立地し、その範囲は南北約600mである。遺跡の立地する小丘陵の最高地点は標高29mである。丘陵の西に位置する旧北上川の間には沖積地が広がっている。また西側には南北100m、東西50mの昆布沼がある。

遺跡の立地する丘陵斜面には西から東へ大小の沢がいくつか入っている。西側斜面南西端は一部切り開かれて桃生小学校永井分校の校地となっていた他、水田や畑として利用されていた。また西側斜面北側から北斜面は杉林となっており、丘陵北側の沢地は水田となっていた（第1図）。

本遺跡周辺の沖積地には遺跡がほとんどみられず、丘陵地やその縁辺に点在している。丘陵西側には古代の茶臼山附近遺跡があり、昆布沼北側には縄文時代の深山貝塚がある。南には中世の永井館跡がある。

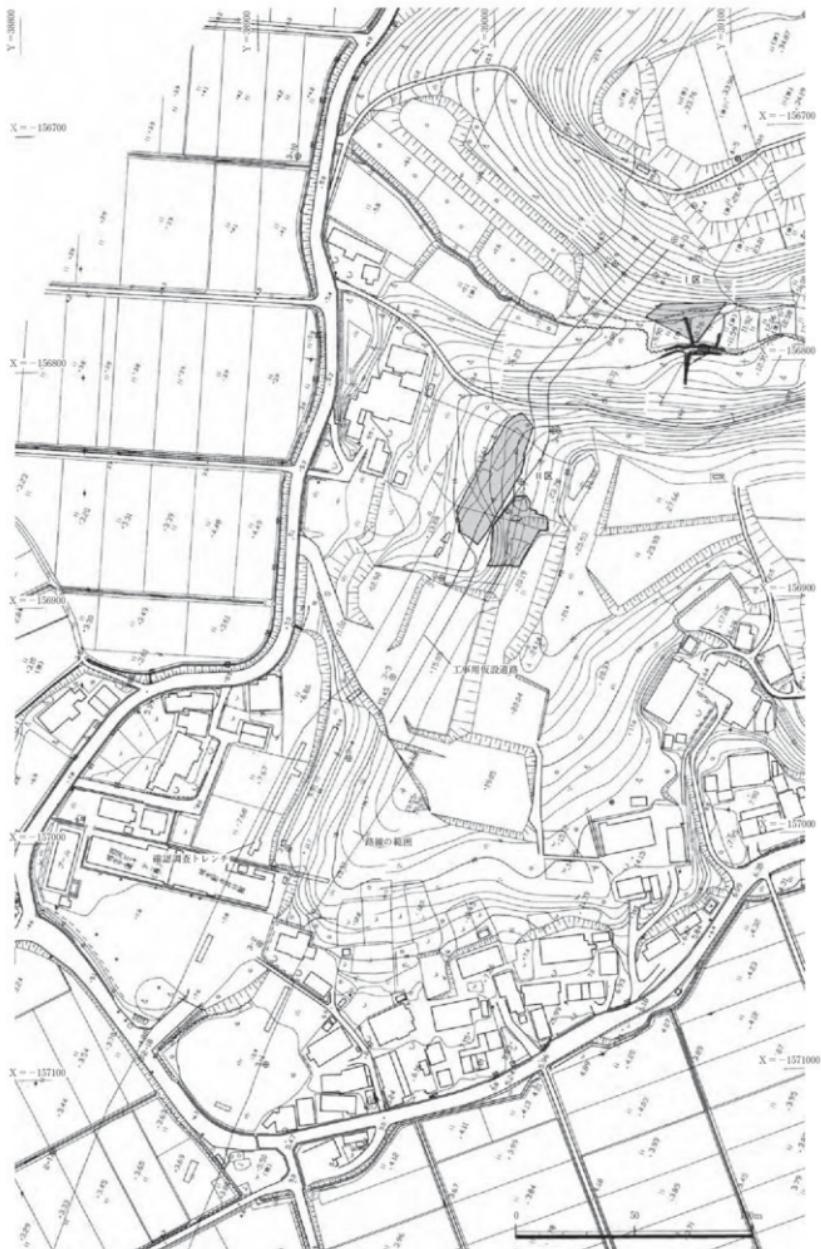
II 調査に至る経過と方法

今回報告する山居遺跡は、三陸自動車道桃生登米道路建設に伴う遺跡の分布調査によって平成12年2月、新規に登録された縄文時代と古代の遺跡である。工事と埋蔵文化財のかかわりを確かめるために平成14年10月8日に確認調査を行った。その結果、遺構は発見されず摩滅した縄文土器片が数点出土したのみであることから慎重工事の対応となった。

平成17年4月下旬から宮城県教育委員会文化財保護課は、石巻市桃生町内で角山遺跡・太田窯跡の調査を開始した。6月上旬、山居遺跡に隣接する丘陵北側の沢地において、函渠建設工事中に大量の縄文土器が出土しているとの通報が地域住民よりもたらされた。県文化財保護課では急速、現地の状況確認を行い、加えて国土交通省の担当者、工事施工業者とともに遺構・遺物の状態を確認した。その結果、縄文時代中～晩期の遺物が大量に出土していることが判明した。また丘陵西側を切り崩した工事用仮設道路の東側法面に古代の住居跡が確認できたため、協議の結果、最初に縄文土器の出土している区域については緊急の発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は6月7日から8月5日まで行った。工事範囲の約200m²に3×3mのグリッドを設定し、分層しながら順次調査を進めていった。この結果、旧河道に関わる水性堆積層、旧河道による侵食、陸成の遺物包含層を確認した。このほか水辺に関わる作業場、土壤、ビット、杭跡などの遺構を検出した。

出土遺物の総量は整理用コンテナ箱で約100箱である。その大部分は縄文時代中期から晩期の土器で、ほかに石器、竹製品のザル、トチの実やシカの骨などの動植物遺存体がある。上部の灰白色火山



第1図 調査区の位置 (1/2000)

灰層付近では土師器、須恵器も出土している。なお、このⅠ区の調査報告は次年度以降に刊行される予定である。

Ⅰ区の調査と並行して、平成17年6月16日から20日まで工事用仮設道路によって切り崩された丘陵西側斜面を対象とする確認調査を石巻市教育委員会と行った。その結果、仮設道路の東西で古代の竪穴住居跡を数軒確認した。なお、仮設道路西側の沢の部分では遺構・遺物は検出されなかった。この結果をうけてⅠ区の調査終了後に仮設道路を含めた周辺の事前調査を行うことが決定した。調査はこの区域をⅡ区として7月11日に開始された。途中9月13日～14日に農業用パイプラインの撤去工事、9月20日に工事用仮設道路の付替え工事を交え10月20日に調査を終了した。調査面積は約1300m²である。本書ではⅡ区について報告する。

調査の方法：検出した遺構などの記録は、日本測地系の国家座標第X系の任意の点X=156,866.000、Y=39,002.000を基準に国家座標上に3m×3mのグリッドを設定して行った。基準点から東に3m、6m、・・・の基準線をE-3、E-6、・・・と呼称し、同時に西に3m、6m、・・・の基準線をW-3、W-6、・・・とした。南北についても同様に、基準点から南にS-3、S-6、・・・北にN-3、N-6、・・・と呼称した。検出した遺構は、グリッドをもとに、縮尺1/20の平面図、断面図や平板測量による1/200の平面図を作成した。同時に800万画素のデジタルカメラ、35mmと6×7のモノクロ・カラースライドフィルムによる写真撮影も行った。

III 発見された遺構と遺物

Ⅱ区の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡12軒、竪穴遺構2軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、柱列2条、焼土遺構4基、ピット多数である。

遺構は、北側の急傾斜部分と南東側の開田による削平部分を除いた調査区全体で検出している。遺構の確認面はすべて地山面である。遺構の多くは丘陵斜面部分にみられ、風倒木痕などの擾乱や後世の削平を受け遺存状況のあまり良好でないものが多い。遺物量は、竪穴住居跡からの出土遺物である土師器・須恵器・赤燒土器などを中心に、整理用コンテナ箱で12箱である。

以下、竪穴住居跡、竪穴遺構、掘立柱建物跡、溝跡、柱列、焼土遺構の順に説明を行う。

1. 竪穴住居跡

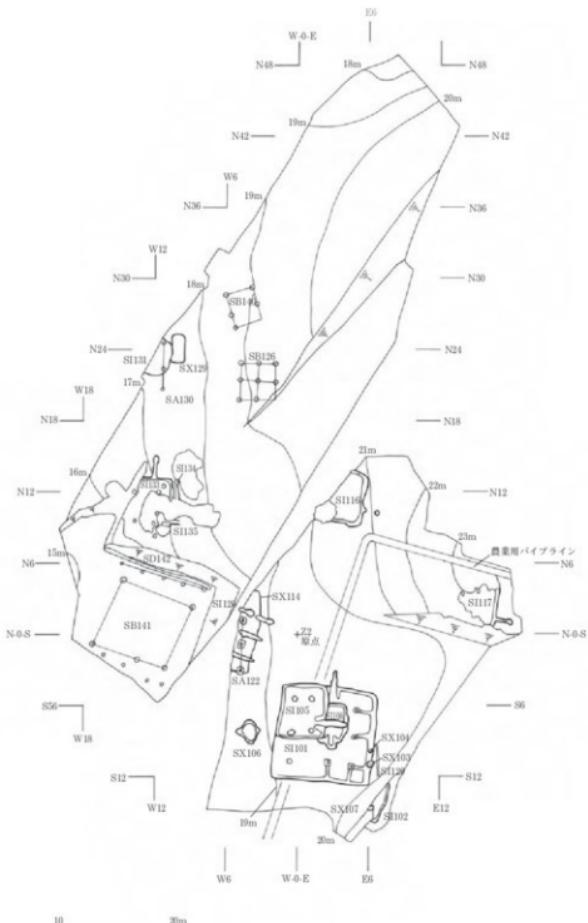
【SI105竪穴住居跡】(第3図)

Ⅱ区南半部東よりで検出した。遺構の西半部は傾斜面のため削平が及んでいる。SI108・SI101竪穴住居跡と重複し、これらより新しい。

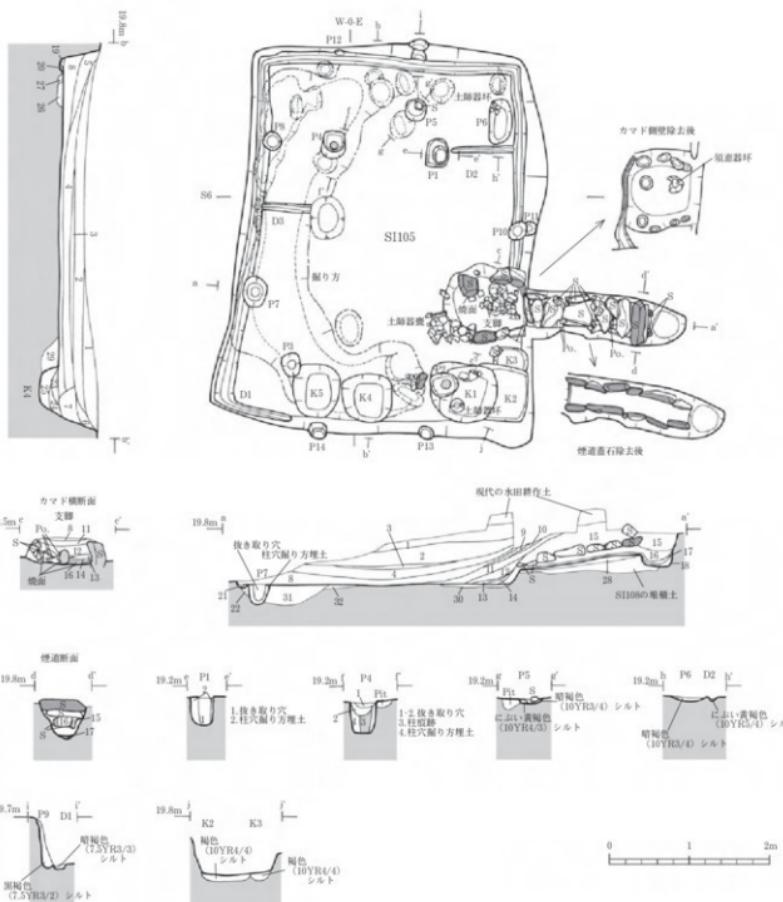
【平面形・規模】 平面形は南北方向に長い長方形を呈する。規模は東西3.8m、南北4.8mである。

【方向】 東辺でみるとN-4°-Eである。

【壁】 やや外側に開いて立ち上がる。丘陵斜面のため西辺の残りは悪い。高さは残りのよい南辺で床面から47cmである。



第2図 遺構配置図 (1/400)



編 号	土 色	土 性	備 考	編 号	土 色	土 性	備 考
1. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	焼土粘土を含む。		17. 黄褐色(10YR3/2B)	シルト	火山灰を含む。砂礫堆積土。	
2. 褐色(10YR4/4)	シルト	汚れた灰白色火山灰を含む。		18. 黄褐色(10YR3/2B)	シルト	火山灰を含む。砂礫堆積土。	
3. 黄褐色(7.5YR2/0)	シルト	炭酸を多量に含む。		19. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	火山灰・泥灰を含む。因溝堆積土。	
4. 黄褐色(10YR3/2S)	シルト	汚れた灰白色火山灰を含む。		20. 黄褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山小礫を含む。因溝堆積土。	
5. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	地山小ぶりコロクを含む。		21. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	火山灰・泥灰を含む。因溝堆積土。	
6. 黄褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山粘土を含む。		22. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫を含む。因溝堆積土。	
7. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	泥灰を含む。		23. 黄褐色(10YR3/2S)	シルト	地山灰を含む。砂礫堆積土。	
8. C.I. 深褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山粘土を多量に含む。		24. 黄褐色(10YR3/4)	シルト	炭灰を含む。砂礫堆積土。	
9. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	地山小礫・小ブロック・燒土粒・粒状を含む。		25. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	地山灰・泥灰を含む。因溝堆積土。	
10. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	地山小礫・小ブロックを含む。		26. 黄褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山礫・ブロックを含む。因溝堆積土。	
11. 黄褐色(10YR4/4)	シルト			27. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫・ブロックを含む。因溝堆積土。	
12. 黄褐色(10YR5/6)	シルト質粘土			28. 明黄色(10YR4/4)	シルト	明黄色の砂礫を含む。砂礫堆積土。	
				29. 黄褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山礫・ブロックを多量に含む。泥灰堆積土。	
				30. C.I. 深褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫を含む。泥灰堆積土。	
13. 黄褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。カマド内堆積土。		31. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫・ブロックを多量に含む。泥灰堆積土。	
14. 黄褐色(10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックと地山粘土を含む。地山堆積土。		32. 黄褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫・ブロックを含む。泥灰堆積土。	
15. C.I. 深褐色(7.5YR3/2)	粘土質シルト	地山粘土・焼土粒を含む。地山堆積土。		33. C.I. 深褐色(7.5YR3/2)	シルト	地山礫を含む。泥灰堆積土。	
16. 黄褐色(10YR4/4)	シルト						

第3図 SI105豊穴住居跡

〔床面〕概ね平坦である。住居の西側には幅70~120cmの弧状をなす厚さ8cm程の溝状の掘り方がみられ、その埋土上面を床とし、それ以外は地山を床面としている。

〔柱穴〕住居平面形の対角線上にある4個が主柱穴と考えられる(P1~P4)。平面形は、隅丸方形、隅丸長方形を呈し、規模は、長辺24~32cm、短辺21~28cm、深さ24~38cmである。埋土は褐色、明黄褐色、にぶい黄褐色シルトである。P2・P4で柱痕跡を確認した。直径9~11cmの円形である。主柱穴以外に住居の北辺、南辺、東辺でそれぞれ2個、壁柱穴を確認した(P9~P14)。平面形は、隅丸方形、長楕円形を呈し、規模は、長辺11~21cm、短辺9~19cm、深さ18~51cmである。埋土は暗褐色シルトである。柱痕跡は確認できなかった。

〔カマド〕住居東辺のやや南寄りに付設されている。カマドの両側壁と煙道、煙出ピット、支脚が残存している。燃焼部は幅90cm、奥行き1.0mである。カマド本体は、地山を掘り込み礫を立て並べ、礫と礫の間に粘土を充填して構築している。右側壁は長さ75cm、幅16cm、高さ23cm、左側壁は長さ86cm、幅28cm、高さ16cm残存している。燃焼部中央には砥石を転用した石製の支脚(第5図-1)が据えられている。側壁内面と支脚上半部、燃焼部は被熱により赤変している。燃焼部には機能時に堆積した厚さ2~4cmの木炭・炭粒を多く含む暗褐色シルト層とカマド廃絶時に堆積した黄褐色シルト質粘土層がみられる。

煙道はカマド奥壁より2.0m外側に延び、その先端に煙出ピットが掘り込まれている。煙道は、地下式でSI108堅穴住居跡の堆積土を切って幅50cm、深さ40cm掘り下げ、側壁と天井を扁平な礫で構築している。側壁の礫は、長さ25~30cm、幅15~20cm、厚さ5~10cm、蓋石は、長さ25~55cm、幅10~35cm、厚さ5~12cmである。煙道の底面から天井部までの高さは10cmである。蓋石間の隙間は土師器の甕片、小礫などを使って塞いでいる。

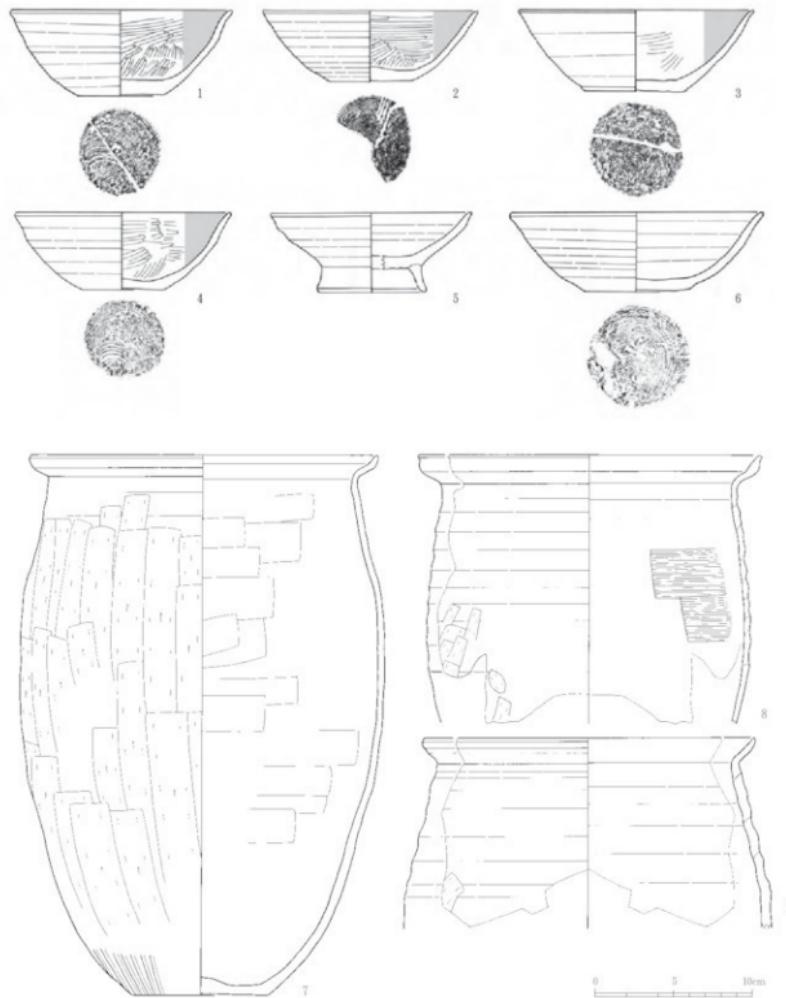
煙出ピットは径32cmの円形を呈し、深さは42cmで、煙道の底面から15cm掘り埋められている。煙道と煙出ピットには炭化物を多く含むにぶい黄褐色粘土質シルト、地山粒、焼土粒を含む暗褐色シルトが堆積し、底面には厚さ2~5cmの炭化物の集積層が認められた。

〔貯蔵穴〕カマド右側で、3基が重複して検出された(K1~K3)。新旧関係はK3→K2→K1である。最も新しいK1は、長辺83cm、短辺72cmの隅丸方形を呈し、深さは18cmである。堆積土は、地山粒、木炭粒を含む暗褐色、褐色シルトである。

〔周溝〕カマド~南辺貯蔵穴部分で途切れる以外は壁際を全周する(D1)。幅7~24cm、深さ1~7cm、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色、暗褐色シルトで地山礫、炭粒、焼土粒を含む。

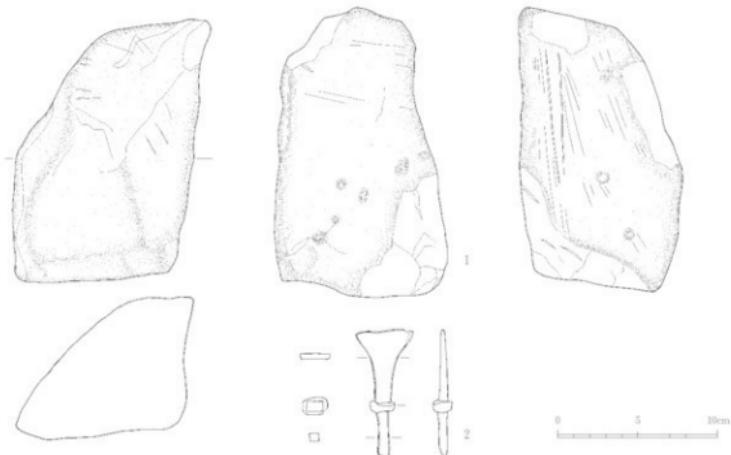
〔その他〕周溝に接続する東西方向に延びる溝を2条検出した(D2・D3)。いずれも規模が長さ60~80cm、幅6~9cm、深さ2cmである。断面形は半円形である。堆積土は地山粒、地山小礫を含むにぶい黄褐色シルトである。南辺で2基の土壌を検出した(K4・K5)。K4は長辺65cm、短辺60cmの隅丸方形を呈し、深さは24cmである。堆積土は地山粒、炭粒を含む暗褐色、褐色シルト、黄褐色シルト質粘土である。K5は長辺65cm、短辺50cmの隅丸長方形を呈し、深さは26cmである。堆積土は暗褐色シルトである。

〔堆積土〕11層に分かれる。2・4層は汚れた灰白色火山灰を含む褐色、にぶい黄褐色シルトであ



No.	器種	幅	高	口径	底径	器高	残存	特徴	写真番号	資料
1	土器器・环	床面	14.1	5.5	5.5	3/4	外面:ロクロナデ 内面:ヘラ+カギ+黒色絵程 瓶部:回転系切り	12-1	SI105-1	
2	土器器・环	床面	(13.8)	5.1	4.5	1/4	外面:ロクロナデ 内面:ヘラ+カギ+黒色絵程 瓶部:回転系切り	12-3	SI105-5	
3	土器器・环	床面穴内底面	15.1	6.4	5.2	完形	外面:ロクロナデ 内面:ヘラ+カギ+黒色絵程 瓶部:回転系切り	12-2	SI105-2	
4	土器器・环	床面	(13.6)	5.1	5.0	2/5	外面:ロクロナデ 内面:ヘラ+カギ+黒色絵程 瓶部:回転系切り	12-4	SI105-4	
5	赤土器・合口杯	カマド内支脚裏	(12.9)	6.7	5.1	2/5	内外面:ロクロナデ 瓶部:切妻+高台貼り付け	12-6	SI105-9	
6	埴走器・环	カマド内	16.0	6.7	5.1	4/5	内外面:ロクロナデ 瓶部:切妻+高台貼り付け	12-5	SI105-8	
7	土器器・瓶	1778#8-9#8道	(21.9)	8.5	34.4	3/5	外面:ロクロナデ+ヘラケツリ+下端面:低窓周縁平行テラキ 内面:ロクロナデ+ヘラナデ	12-7	SI105-7	
8	土器器・瓶	煙道石組部	(21.7)	(17.0)	34.0	完形	外面:ロクロナデ+ヘラケツリ 内面:ロクロナデ+ヘラナデ	12-8	SI105-5	
9	土器器・瓶	カマド内支脚裏	(20.9)	(12.1)	34.0	完形	外面:ロクロナデ+ヘラケツリ 内面:ロクロナデ	12-9	SI105-6	

第4図 SI105整穴住居跡出土土器



品種	断面	直径	口径	底径	器高	残存	特徴	写真番号	地質
1 砥石	カマド内(支脚)				ほぼ実形 長:18.1cm 幅:15.6cm 厚:8.2cm	底面2面		12-11	SI105-11
2 鉄錆	堆積層				18.0-17.8cm	底径:6.3cm 壁厚:1.4cm	底面:1.8cm 壁厚:1.3cm	12-10	SI105-12

第5図 SI105竪穴住居跡出土石製品・金属製品

る。1・3層、5～11層は地山小礫、地山小ブロック、焼土粒、炭粒を含む黒褐色、極暗褐色、暗褐色、にぶい黄褐色、褐色シルト・シルト質粘土である。いずれも自然堆積である。

【出土遺物】床面から土師器壺（第4図-1、2、4）・甕、P6から土師器壺・甕、貯蔵穴K1から土師器壺（4図-3）、カマド内から須恵器壺（第4図-6）、砥石を転用した支脚（第5図-1）が出土した。カマド焼き口からはカマド廃絶に伴って廃棄された状態の土師器甕（第4図-7）が出土した。カマド支脚左奥から土師器甕（第4図-9）、赤焼土器高台壺（第4図-5）、煙道石組部から土師器甕（第4図-8）が出土した。土師器はすべてロクロ調整である。なお第4図-7の土師器甕は底部周縁を叩き出して成形している。堆積土から土師器壺・甕の破片、須恵器壺・甕の破片、赤焼土器壺の破片、鉄錆（第5図-2）が出土している。土師器のなかには非ロクロ調整のものが若干含まれる。

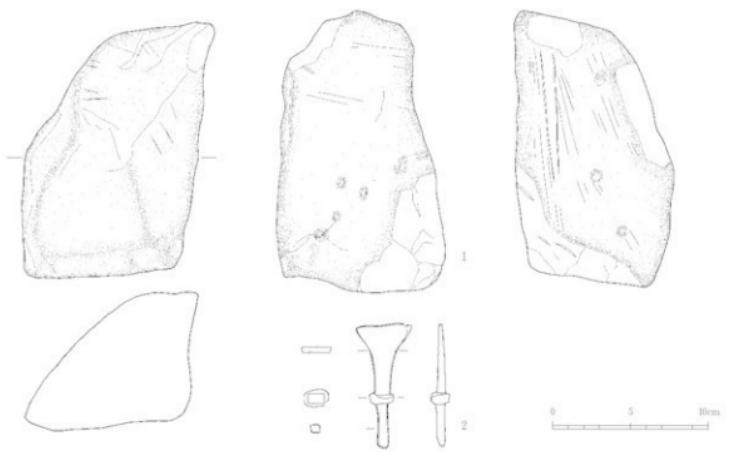
【SI108竪穴住居跡】（第6図）

II区南部東よりで検出した。SI105・101竪穴住居跡と重複し、SI105竪穴住居跡よりも古く、SI101竪穴住居跡よりも新しい。SI105竪穴住居跡により西側が削平されている。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、東西2.7m以上、南北3.1mである。

【方向】東辺でみるとN-14°-Eである。

【壁】SI101竪穴住居跡の堆積土と地山を壁とし、やや外側に開くように立ち上がる。高さは残りの最も良い北辺で69cmである。



No.	器種	層位	脚	口径	底径	高さ	残存	特徴	写真番号	登録番号
1	砥石	カマド内底部				長18.4cm	幅13.6cm	厚3.2cm 底面2面	13-11	SI105-18
2	鉄錆	堆積層				先端1.5cm	底径1.5cm	高さ1.5cm 底面1.5cm 側面1.5cm 底面1.5cm 高さ1.5cm 底面1.5cm 側面1.5cm	13-10	SI105-12

第5図 SI105堅穴住居跡出土石製品・金属製品

る。1・3層、5～11層は地山小礫、地山小ブロック、焼土粒、炭粒を含む黒褐色、極暗褐色、暗褐色、にぶい黄褐色、褐色シルト・シルト質粘土である。いずれも自然堆積である。

【出土遺物】床面から土師器壺（第4図-1、2、4）・甕、P6から土師器壺・甕、貯蔵穴K1から土師器壺（第4図-3）、カマド内から須恵器壺（第4図-6）、砥石を転用した支脚（第5図-1）が出土した。カマド焚き口からはカマド廃絶に伴って廃棄された状態の土師器甕（第4図-7）が出土した。カマド支脚左奥から土師器甕（第4図-9）、赤焼土器高台壺（第4図-5）、煙道石組部から土師器甕（第4図-8）が出土した。土師器はすべてロクロ調整である。なお第4図-7の土師器甕は底部周縁を叩き出して成形している。堆積土から土師器壺・甕の破片、須恵器壺・甕の破片、赤焼土器壺の破片、鉄錆（第5図-2）が出土している。土師器のなかには非ロクロ調整のものが若干含まれる。

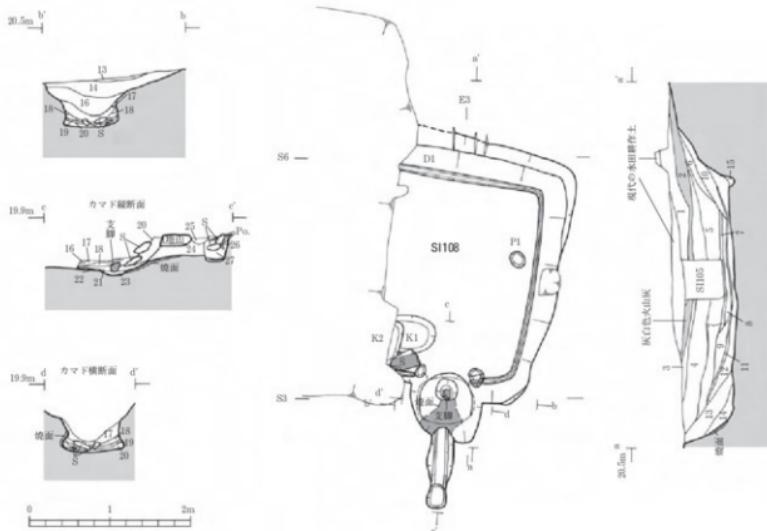
【SI108堅穴住居跡】（第6図）

II区南半部東よりで検出した。SI105・101堅穴住居跡と重複し、SI105堅穴住居跡よりも古く、SI101堅穴住居跡よりも新しい。SI105堅穴住居跡により西側が削平されている。

【平面形・規模】平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は、東西2.7m以上、南北3.1mである。

【方向】東辺でみるとN-14°-Eである。

【壁】SI101堅穴住居跡の堆積土と地山を壁とし、やや外側に開くように立ち上がる。高さは残りの最も良い北辺で69cmである。



第6図 SI108堅穴住戸跡

「床面」概ね平坦で、地山を床面としている。

〔柱穴〕東辺際やや北寄りで1個検出した(P1)。径20cmの円形で、深さは6cmである。堆積土はにぶい黄褐色シルトで、炭粒、地山粒を含む。柱痕跡は確認されなかった。

〔カマド〕住居南辺に付設されている。カマド両側壁、煙道、煙出ピットを検出した。カマドはSI101の堆積土と地山を掘り込み住居南辺ラインより外側に張り出す形で構築されている。両側壁部上面および前面からは被熱のため赤色変化し破碎した小礫が多数検出されているが、これらの小礫はカマドの構築材と思われる。燃焼部は幅85cm、奥行き90cmである。右側壁は長さ87cm、幅22cm、高さ36cm、左側壁は長さ90cm、幅13cm、高さ38cm残存している。両側壁の先端部には、周溝と接続して径15~18cm、深さ3~6cmの円形の据え穴を伴う礫が検出された。燃焼部中央よりやや前面には径25cm、深さ5cmの円形を呈する据え穴が掘り込まれ石製の支脚が設置されている。両側壁前面からカマド奥壁にかけて被熱による赤変が顕著である。カマド内の堆積土は、地山粒、燒土粒、炭



No	器種	層	標	口径	底径	高さ	残存	特	備	写真番	登録
1	土器器・焼	11)外型焼跡	(21.2)	(4.5)	(3.8)	外側:ロクロナメ→ヘラケズリ・下部に薙付着 内面:ロクロナメ			13-8	SI108-1	

第7図 SI108堅穴住居跡出土土器

粒を含む褐色シルト、黄褐色シルト、黒褐色シルト、明黄褐色シルト、暗赤褐色シルトである。また、カマド内堆積土には構築材として使われていた礫が多く含まれている。

煙道はカマド奥壁より1.0m外側に延びその先端部に煙出ピットを伴う。煙道は地山を掘り抜いて作られており煙出ピットとの接続部ではカマド廃絶後に陥没した箇所がみられる。断面形は縦12~15cm、横25~35cmの長方形をなす。また煙道底面と天井部は被熱により赤色硬化している。

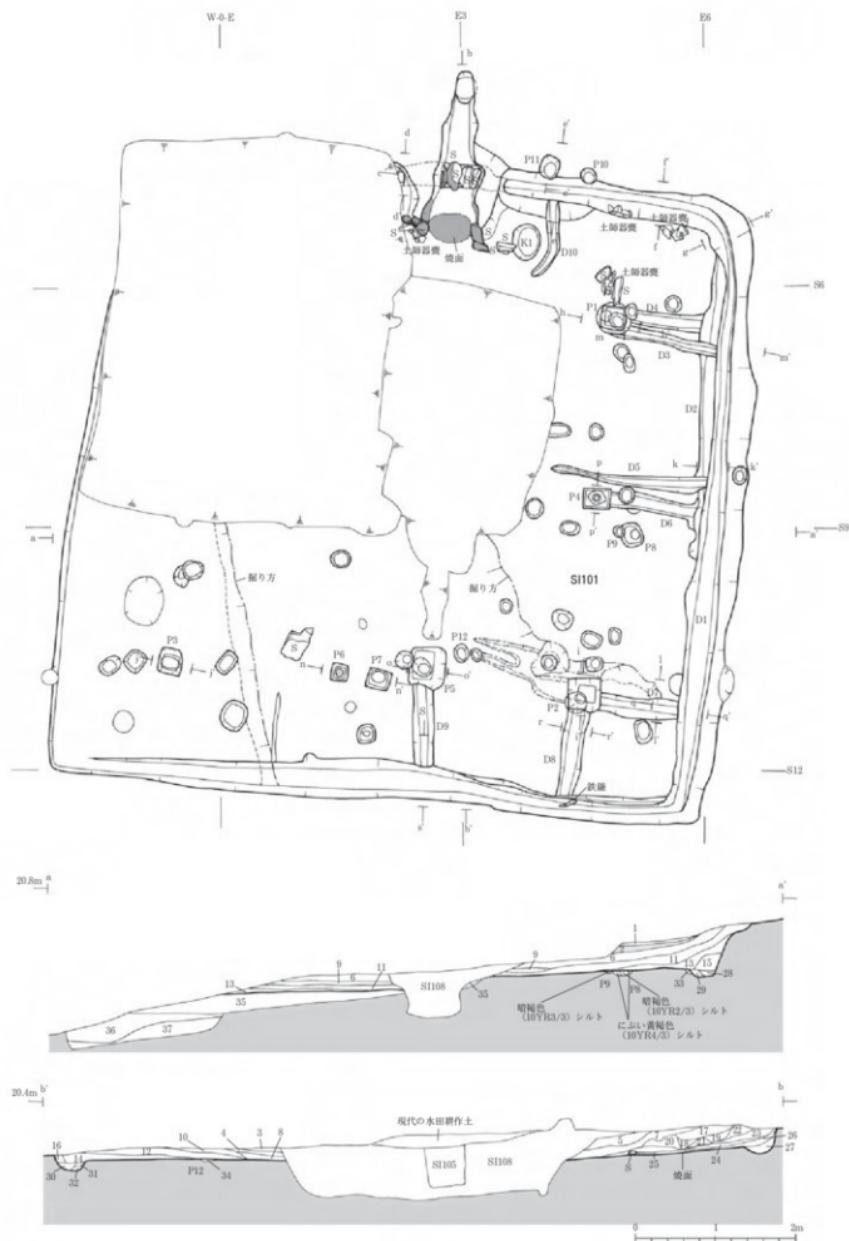
煙出ピットは、長辺27cm、短辺23cmの隅丸方形を呈し、深さは35cmである。煙道と煙出ピットの堆積土は、暗褐色シルト、褐色シルトで地山粒を含む。煙出ピットからは廃絶時に投棄されたと思われる礫やロクロ調整の土師器甕が出土した。

〔貯蔵穴〕 カマド右側に重複して2基検出された（K1・K2）。K2がK1より新しい。いずれもSI105堅穴住居跡によって西半部が失われている。K1は、長径50cm以上、短径46cmの楕円形を呈し、深さは7cmである。堆積土は地山ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。K2は、長径55cm、短径12cm以上の楕円形もしくは隅丸方形を呈し深さは16cmである。堆積土はカマドの構築材と思われる焼けた礫や焼土ブロックを含む暗褐色シルトである。

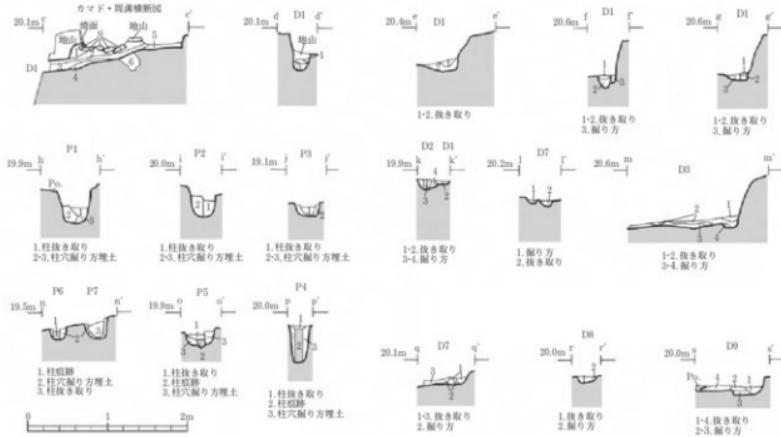
〔周溝〕 カマド部分で途切れる他は全周すると思われる（D1）。幅4~8cm、深さ3~8cmほどである。断面形はU字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色シルトである。

〔堆積土〕 14層に分かれる。1層は地山粒、焼土粒を含む黒褐色シルト、2層は汚れた灰白色火山灰ブロックを含む暗褐色シルト、3・5・12・13層は地山粒・ブロックを含む褐色シルト・シルト質粘土、4・6・7・14層は地山粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルト、8・11層は焼土粒、炭粒を含む極暗赤褐色、暗赤褐色シルト、9・10層は地山粒・ブロックを含むにぶい黄褐色シルト質粘土である。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 遺物の出土はわずかである。図示できるものとしてカマド内～煙道堆積土から内外面ロクロ調整され外面をヘラケズリされた土師器甕（第7図-1）が出土した他、煙出ピットからロクロ調整の土師器甕の破片が出土している。また堆積土からロクロ調整の土師器甕、赤焼土器坏、須恵器



第8図 SI101堅穴住居跡 (1)



層	上 色	主 料	備	層	上 色	主 料	備
1	褐褐色(7YR1/2)	シルト	地山粒を含む。	23	褐褐色(10YR2/6)	シルト	地山ブロック・土粒を含む。地造堆積土。
2	こい・褐色(3YR6/3)	シルト	从白色火成灰灰。	24	こい・黄色色(3YR1/3)	シルト	褐色ブロックを多く含む。大量的漂浮土。地造堆積土。
3	褐色(10YR4/6)	シルト		25	褐褐色(9YR1/3)	シルト	褐色ブロック・泥炭を多く含む。カマド内堆積土。
4	褐褐色(10YR4/3)	シルト		26	褐褐色(10YR2/2)	シルト	灰岩を多量に含む。地造堆積土。
5	褐褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒を含む。	27	黄褐色(10YR4/6)	シルト	地山ブロックを多く含む。表面土と少量化。地ビット発現。
6	褐褐色(7YR4/3)	シルト	地山粒・地土粒を含む。	28	褐褐色(10YR2/2)	シルト	褐色ブロックを含む。地造堆積土。
7	褐褐色(7YR4/2)	シルト	地土粒を含む。	29	こい・黄色色(3YR1/3)	シルト	地山ブロックを含む。地造堆積土。
8	褐色(10YR4/6)	シルト	地土粒を含む。	30	褐褐色(10YR3/2)	シルト	地山磚を含む。地造堆積土。
9	こい・黄色色(3YR4/3)	シルト	地山ブロックを含む。ややアライ化。	31	褐褐色(10YR3/4)	シルト	地山磚を含む。地造堆積土。
10	灰青褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む。ややアライ化。	32	こい・黄色色(3YR1/3)	シルト	地山磚を多量に含む。地造堆積土。
11	灰青褐色(10YR4/1)	シルト	地山粒・地土粒を含む。	33	褐褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。日向浦堆積土。
12	灰青褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含む。ややアライ化。	34	こい・黄色色(3YR4/3)	シルト	地山磚を多量に含む。
13	こい・黄色色(3YR4/3)	シルト	地山ブロック・地土粒を含む。	35	こい・黄色色(3YR1/3)	シルト	地山磚・ブロックを多量に含む。掘り方埋土。
14	こい・黄色色(3YR4/3)	シルト	地山ブロック・地土粒を含む。ややグライ化。	36	褐褐色(10YR2/2)	シルト	地山磚・ブロックを多量に含む。掘り方埋土。
15	黄褐色(10YR3/6)	シルト	地山粒を含む。	37	褐褐色(10YR4/6)	シルト	地山磚・ブロックを多量に含む。
16	褐褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。	S.1	こい・黄色色(3YR1/3)	シルト	地山粒・柱土粒・炭酸を含む。
17	褐褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を含む。	2	褐褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒・柱土粒・炭酸を含む。
18	褐赤褐色(3YR5/3)	シルト	地山粒・地土粒を含む。	3	褐赤褐色(3YR1/3)	シルト	地山粒・柱土粒・炭酸を含む。
19	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒・地土粒を含む。	4	こい・黄色色(3YR4/3)	シルト	地山磚・ブロックを含む。
20	褐褐色(10YR4/6)	シルト	天井部崩落土。	5	褐褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒を含む。
21	褐褐色(10YR4/6)	シルト	天井部崩落土。	6	こい・黄色色(3YR5/3)	シルト	地山磚を多量に含む。
22	褐褐色(3YR4/6)	シルト	天井部崩落土。				

第9図 SI101豎穴住居跡（2）

甕の破片が出土した。

【SI101豎穴住居跡】（第8・9図）

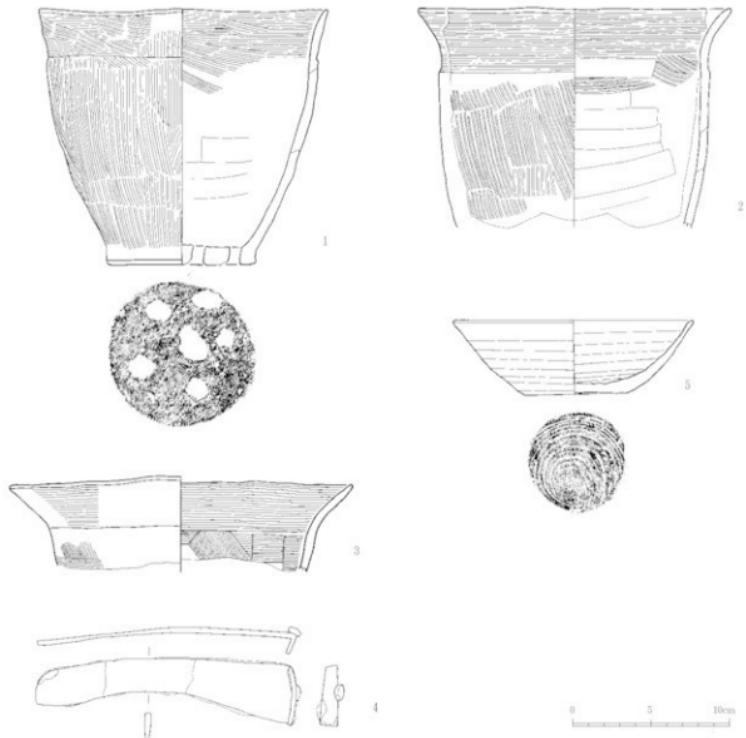
II区南半部東よりで検出した。SI108・SI105・SI129豎穴住居跡、SX103・SX104焼土造構と重複しこれらより古い。住居跡の北西部分はSI105豎穴住居跡により削平されている。西辺部も削平により壁と床面が壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形は正方形を基調とする。規模は東西8.2m、南北8.0mである。

〔方向〕 東辺でみるとN-5°-Eである。

〔壁〕 直立気味に立ち上がる。高さは残りの良い東辺で床面より60cmである。

〔床面〕 住居跡の中央部から東側にかけて地山を床面とし、西側では厚さ22~36cmの掘り方埋土上面を床としている。



%	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	写真番号	登録番号
1	土器器・瓶	床面直上	(18.3)	10.3	16.3	2/3	外面:ヨコナデ→ハケメ→ラナダ 内面:ヨコナデ→ハケメ→ラナダ 底部:ハケズリ→穿孔(六孔)	E3-1	SIH01-1
2	土器器・瓶	床面直上	(19.0)	(14.0)	(8.0)	3/4	外面:ヨコナデ→ハケメ 内面:ヨコナデ→ハケメ→ラナダ	E3-2	SIH01-3
3	土器器・瓶	床面直上	21.8	8.1	10.1	1/2	内外面:ヨコナデ→ハナダ	E3-5	SIH01-2
4	鉢	形溝有機質上面					完形: 直16.9cm 幅15.6cm 厚1.4mm 石利き削の直刃縫 無葉で基面折り返し 痕と身の發着角度95°	E3-6	SIH01-7
5	土器器・杯	堆土層上面	15.2	6.4	4.9	4/5	内外面:ロクロナデ・火傳伝 瓦部:剥離赤面切り「一」の撇別	E3-3	SIH01-4

第10図 SI101竪穴住居跡出土土器・金属製品

【柱穴】主柱穴は4個検出した(P1~P4)。方形もしくは長方形を基調とし、規模は長辺33~50cm、短辺25~40cm、深さは37~50cmである。埋土は暗褐色シルト、黄褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、明黄褐色シルトで、地山粒、礫を含む。柱はいずれも抜き取られている。柱痕跡はP4で確認されている。径8cmの円形を呈し、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。

【カマド】カマドは北辺ほぼ中央部に付設されている。両側壁、煙道、煙出ピットが残存している。燃焼部は幅1.2m、奥行き1.0mである。カマド両側壁は地山を削り出して基底部を構築しており、残存している右側壁は長さ95cm、幅55cm、高さ8cm、左側壁は長さ96cm、幅52cm、高さ16cmである。焼き口部は長さ20~25cm、幅10~15cm、厚さ5~10cmの礫を利用してつくられている。両側壁内面と燃焼部は被熱によって赤色硬化している。また、カマドの奥壁沿いはトンネル状に地山が掘

り抜かれており周溝に接続する。

煙道はカマド奥壁より1.2m外側に延び先端には煙出ビットが付設されている。煙道は地山を幅25～60cm、深さ19～21cmに掘り抜いて構築されており、埋没過程で天井部が崩落している。煙道底面は煙出ビットに向かって緩やかに高くなっている。

煙出ビットは長辺42cm、短辺24cmの隅丸長方形を呈し、深さは36cmである。煙出ビットの底面は煙道底面より12cmほど掘り窪めてある。煙道と煙出ビットの堆積土は、黒褐色シルト、褐色シルト、暗赤褐色シルト、黄褐色シルトで地山ブロック、焼土ブロック、炭粒を含む。

【貯蔵穴】カマドの右側に設置されている（K1）。平面形は楕円形を呈する。規模は長径45cm、短径33cm、深さ16cmである。貯蔵穴の東側には周溝に接続して南北方向に貯蔵穴を半周するような形で長さ95cm、幅15cm、深さ6cmの溝が巡っている（D10）。

【周溝】南辺、東辺、北辺で確認している（D1・D2）。幅25～50cm、深さ5～25cmで、断面形は半円形である。周溝は一度つくり直されている。また周溝はカマド部分では長さ25～35cm、幅6～18cm、厚さ4～7cmの板状の礫を蓋石としている。堆積土は黒褐色シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、黄褐色砂質シルトで地山粒を含む。自然堆積である。

【その他】東辺側に5条（D3～D7）、南辺側に2条（D8・D9）床面の溝を検出した。主柱穴、柱穴、周溝に接続している。住居内の間仕切りの施設に関連する溝と考えられる。規模は長さ1.0m～1.9m、幅15～25cm、深さ2～10cmで、断面形は逆台形ないしU字形である。堆積土は暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトで地山粒を含む。東辺側の溝はそれぞれ新旧2時期の周溝に接続している。

【堆積土】16層に分かれる。1層は地山粒を含む黒褐色シルト、2層は灰白色火山灰層、3・8層は焼土粒を含む褐色シルト、4～7・16層は地山粒、焼土粒を含む暗褐色シルト、9・13・14層は地山ブロック・礫、焼土粒を含むにぶい黄褐色シルト、10～12層は地山ブロック、地山粒、焼土粒を含む灰黄褐色シルト、15層は地山礫を含む黄褐色シルト質粘土である。いずれも自然堆積である。

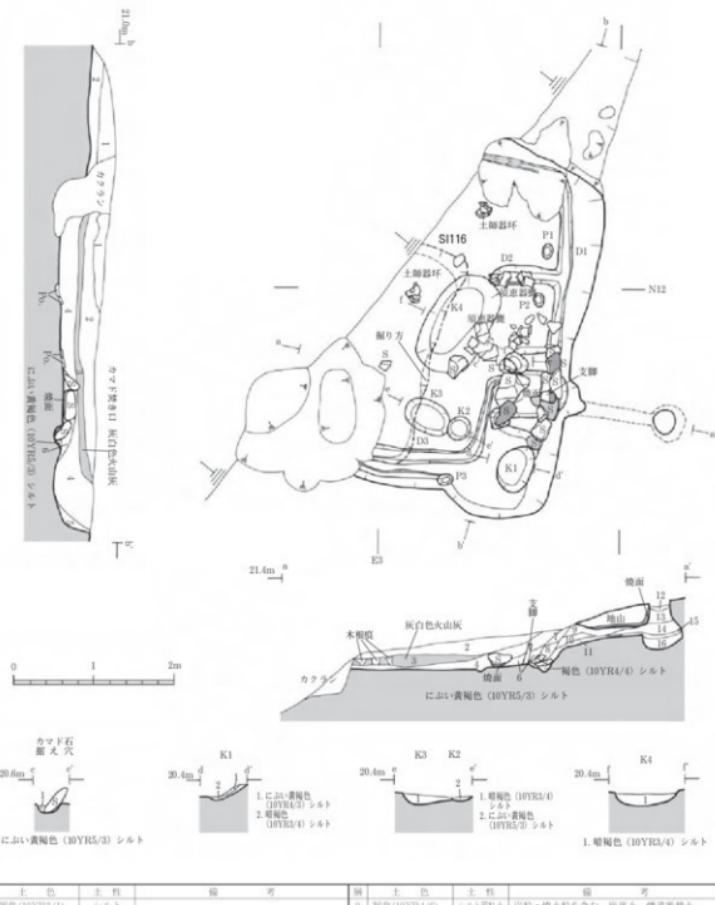
【出土遺物】住居跡の北東隅付近の床面直上から非クロクロ調整の土師器瓶（第10図-1）、甕（第10図-2、3）、床面南東隅の周溝堆積土上面から鉄鎌（第10図-4）が出土した他、カマド左側壁から非クロクロ調整の土師器甕の破片、煙出ビット堆積土から非クロクロ調整の土師器壺・甕の破片、鉄滓、床面P1から非クロクロ調整の土師器甕の破片、床面の溝から非クロクロ調整の土師器甕の破片、周溝から非クロクロ調整の土師器壺・甕の破片が出土した。また、床面の溝、周溝、掘り方埋土からはそれぞれ繩文土器の破片が出土した。その他、住居堆積土から非クロクロ調整の土師器壺・甕の破片、クロクロ調整の土師器壺の破片、赤燒土器壺・高台壺、須恵器壺（第10図-5）・甕が出土した。

【SI116竪穴住居跡】（第11図）

II区の中央部で検出した。他の構造との重複はない。住居跡の西半部は工事用仮設道路の掘削により失われており、北辺と南辺が攪乱で壊されている。

【平面形・規模】平面形は、南東隅部分がやや南に張り出す隅丸方形を呈すると思われる。規模は東西2.8m以上、南北4.5mである。

【方向】東辺でみるとN-9°-Eである。

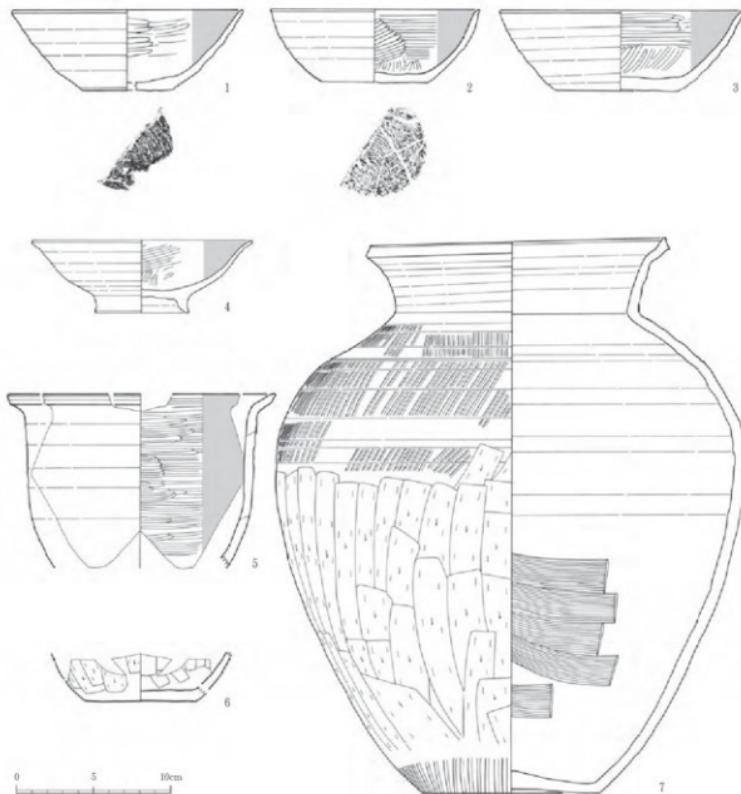


第11図 SI116竪穴住居跡

〔壁〕外側に傾斜しながら立ち上がる。高さは最も残りの良い東辺で73cmである。

〔床面〕概ね平坦である。住居東側は地山面、西側は厚さ15~27cmの掘り方埋土上面を床としている。

〔柱穴〕東辺壁際で2個(P1・P2)、南辺で壁柱穴1個(P3)を検出した。平面形は梢円形を呈す



No.	器種	断面	径	底径	壁厚	高さ	残存	特徴	写真箇	意 緒
1	土器	カマド周溝底部	[14.0]	8.0	5.2	1/4	外面:ロクロナゲ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附 底部:回転舟切り	14-1	SI116-3	
2	土器	底面	[15.0]	8.7	4.8	1/3	外面:ロクロナゲ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附 底部:回転舟切り	14-5	SI116-2	
3	土器	横	[13.7]	8.0	4.2	2/3	外面:ロクロナゲ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附 底部:回転舟切り	14-2	SI116-1	
4	土器	高台付	[14.2]	8.0	4.7	2/3	外面:ロクロナゲ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附 底部:切り離し・高台貼り付け	14-5	SI116-6	
5	土器	小切妻 張り方	[17.2]	0.1(0)	1/5	外面:ロクロナゲ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附	14-7	SI116-4		
6	土器	底	[7.2]	6.0	0.1	底付	外面:ロクロナゲ・ハラタギ 内面:ロクロナゲ・ハラタギ 底部:ハラケズリ	14-6	SI116-5	
7	土器	底面	19.0	11.5	9.6	1/5	外面:平行チャコロ・ロクロナゲ・ハラケズリ・残存 内面:ロクロナゲ・ハラタギ 底部:ナダ	14-1	SI116-7	

第12図 SI116整穴住居跡出土土器

る。規模は長径16~18cm、短径12~14cm、深さ5~30cmである。

[カマド] 東辺やや南寄りに付設されている。カマドの両側壁と煙道、煙出ピット、支脚が残存している。燃焼部は幅94cm、奥行き1.1m、残存している右側壁は長さ65cm、幅25cm、高さ13cm、左側壁は長さ72cm、幅35cm、高さ15cmである。焚き口部には径25cm、深さ8~16cmの円形の据え穴を伴う長さ20~33cm、幅10~12cm、厚さ10cmの礫が対になって立てられておりその間に長さ42cm、

幅38cm、厚さ16cmの礫が落ち込んでいる。いずれの礫も被熱によって赤色変化しておりこれらの礫が焚き口部の構築材として用いられていたものと考えられる。カマド内からは長さ12cm、幅4cm、厚さ4cmの直方体をした石製の支脚が見つかっている。なおカマド内の周溝は、長さ20~40cm、幅10~20cm、厚さ5cmの9枚の板状の礫を蓋石にした暗渠となっている。カマド内の堆積土は暗褐色シルト、褐色シルトでカマドの崩落土と思われる。

煙道は地山を幅12~16cm、深さ10~14cmに掘り抜いて作られており奥壁から外側に90cm延びている。煙道の先端には煙出ピットが付設されている。煙道天井部は被熱により赤色硬化している。煙道底面は煙出ピットに向かって緩やかに高くなっている。

煙出ピットは長径30cm、短径26cmの楕円形を呈し、深さは62cmで、煙道の底面より18cm掘り埋められている。煙道と煙出ピットの堆積土は褐色シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、黒色シルト、黒褐色シルトで炭粒、焼土粒、地山ブロックを含む。煙出ピットは流入土が自然堆積した後で埋め戻されている。

【貯蔵穴】 カマド右側で検出した（K1）。平面形は楕円形を呈する。規模は長径60cm、短径45cm、深さ4cmである。

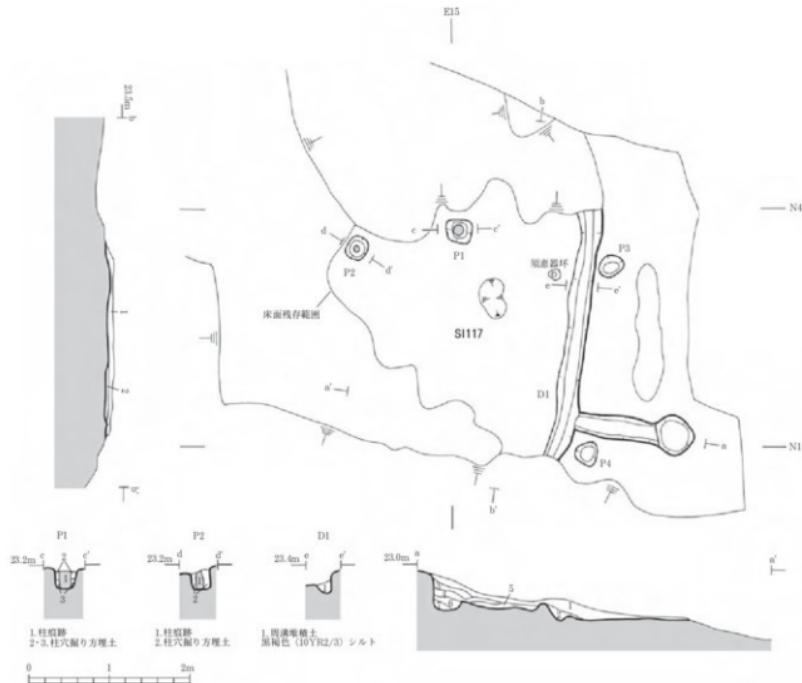
【周溝】 住居跡の南東隅部分を除いた北辺、東辺、南辺で検出している（D1）。幅8~25cm、深さ3~9cmで、断面形は半円形である。規模は幅8~25cm、深さ3~9cmである。北辺と東辺ではカマド内の暗渠施設と接続する。堆積土は褐色シルト、暗褐色シルトで、特に南辺の堆積土には炭粒や焼土ブロックが含まれている。

【その他】 住居の床面下で楕円形をした3基の土壙を検出した（K2~K4）。このうちK3はK2と重複し、K2が新しい。規模はK2が長径30cm、短径25cmで、深さが3cm、堆積土はにぶい黄褐色シルトである。K3は長径55cm、短径40cmで、深さが11cm、堆積土は暗褐色シルトである。K4は長径13m、短径76cmで、深さが12cm、堆積土は暗褐色シルトである。

東辺部中央北よりでは周溝に接続して西側に85cmほど延びる床面の溝を検出した（D2）。規模は幅18~22cm、深さ5cmで、断面形は逆台形である。堆積土は暗褐色シルトである。また焚き口中央部からクランク状に折れ曲がり南辺に平行に延びる床面の溝を検出した（D3）。規模は幅8~20cm、深さ2~10cmで、断面形は逆台形である。堆積土は炭粒、焼土粒を含む黒褐色シルトである。

【堆積土】 7層に分かれ。1層は黒色シルト、2層は褐色シルトで灰白色火山灰を起源とする。3層は灰白色火山灰の水成堆積である。4層は暗褐色シルトで地山小礫、炭粒、焼土粒を含む。6~8層は暗褐色シルト、黄褐色シルト・シルト質粘土で壁の崩落土である。なお4層中に比較的多くの炭粒、焼土粒が含まれることから焼失住居の可能性も考えられる。

【出土遺物】 床面からはロクロ調整の土師器壺（第12図-2、3）・甕（第12図-6）、須恵器甕（第12図-7）、鉄滓、カマド内周溝底面からロクロ調整の土師器壺（第12図-1）が出土した他、K2~K4の堆積土からロクロ調整の土師器甕の破片、掘り方埋土からロクロ調整の土師器小型甕（第12図-5）が出土した。堆積土からはロクロ調整の土師器壺・高台壺（第12図-4）・甕、赤焼土器壺、



層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	褐褐色(10YR4/3)	シルト	地山枠・埴土枠・炭灰を含む。	5	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山ブロック・埴土枠・黄灰を含む。煙道堆积。
2	褐褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロック・地山枠を含む。埴土枠・炭灰を多量に含む。	6	褐褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロック・埴土枠を含む。煙出ビット堆积。
3	褐褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック・炭灰を含む。煙道堆积。	7	褐褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	地山枠・埴土枠を含む。烟出ビット堆积。
4	褐褐色(10YR4/2)	粘土質シルト	地山枠・炭灰を含む。煙道堆积。				

第13図 SI117竪穴住居跡

須恵器甕が出土した。なお床面の遺物には外面に被熱の痕跡が認められるものや煤の付着したもののが含まれている。

【SI117竪穴住居跡】(第13図)

II区の東側で検出した。他の遺構との重複はない。住居跡の北半部から南半部および西半部にかけて削平され遺構の遺存状況は良くない。

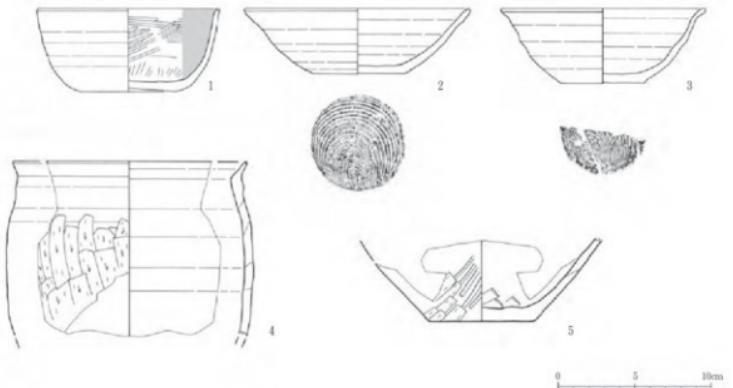
【平面形・規模】 平面形は方形を呈するものと思われる。規模は東西3.3m以上、南北3.2m以上である。

【方向】 東辺でみるとN-12°-Eである。

【壁】 床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは東辺で22cmである。

【床面】 西側にむかって緩やかに傾斜し、地山を床面としている。

【柱穴】 床面で2個検出した(P1・2)。長辺28~32cm、短辺24~28cmの隅丸方形を呈し深さは26



第14図 SI117堅穴住居跡出土土器

~30cmである。埋土は暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトで地山粒、地山ブロック、炭粒を含む。柱痕跡は径7~15cmの円形を呈する。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色シルトで地山粒、炭粒、焼土粒を含む。柱間寸法は1.3mである。また住居外東辺際で径30cm、深さ40cmほどの円形のビットを2個(P3・4)検出しているが、住居跡に伴うものと思われる。

【カマド】住居跡の東辺に付設されている。煙道と煙出ビットのみ残存している。煙道はカマド奥壁から1m外側に延び先端に煙出ビットが付設されている。煙道は幅25~30cm、深さ10~20cmに地山を掘り下げて作られている。煙道の底面は煙出ビットにむかって緩やかに高くなっている。煙出ビットは長径50cm、短径45cmの楕円形を呈し、深さは43cmで煙道の底面より12cmほど掘り進められている。煙道と煙出ビットの堆積土は暗褐色シルト・粘土質シルト、黒褐色シルト・粘土質シルトで、地山粒・ブロック、焼土粒、炭粒を含む。いずれも自然堆積である。

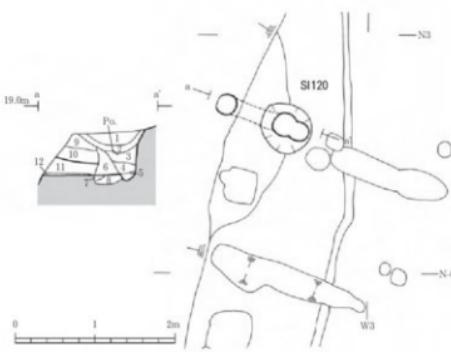
【貯蔵穴】検出されなかった。

【周溝】住居跡東辺で検出した(D1)。幅25~30cm、深さ1~15cmで、断面形はU字形である。堆積土は黒褐色シルトで、地山粒・ブロック、焼土粒を含む。自然堆積である。

【堆積土】2層に分かれ。1、2層とも暗褐色シルトで2層には焼土粒、炭粒が多く含まれる。自然堆積である。

【出土遺物】遺構の残存状況が悪いためそれほど多くない。東壁際の床面上から回転糸切りされた須恵器環(第14図-2)、カマド付近の床面上から須恵器環(第14図-3)、ロクロ調整の土師器甕(第14図-5)、煙道堆積土からロクロ調整の土師器甕(第14図-1)・甕が出土した他、住居確認面

No.	器種	層位	口径	底径	高さ	残存	特徴	写真場所	登録番号
1	土師器・环	カマド-煙道隙縫	(11.8)	6.1	5.1	1/3	外面:ロクロナデ 内面:ヘラキギ-黒色陶理 底部:回転糸切り	14-11 SI117-1	
2	須恵器・环	床面上直上	14.6	6.0	4.3	3/4	内外面:ロクロナデ 底部:回転糸切り	14-11 SI117-1	
3	須恵器・环	177mm+60mm	(13.2)	5.4	4.9	1/4	内外面:ロクロナデ 底部:回転糸切り	14-12 SI117-2	
4	土師器・甕	過積確認	(15.2)	(11.4)	1.6	外面:ロクロナデ-ヘラキギリ・縦付着 内面:ロクロナデ	14-8 SI117-3		
5	土師器・甕	177mm+60mm	6.9	5.3	0.8-0.9	外面:平行タテキ-ヘラキギリ 内面:ヘラナデ-ナデ 底部:ヘラキギリ	14-9 SI117-4		



層	上色	土性	種考
1	褐褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(新)堆積土。
2	褐褐色(10YR10/0)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(新)堆積土。
3	褐褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(新)堆積土。
4	褐色(10YR8/4)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(新)堆積土。
5	褐褐色(10YR10/0)	シルト	地山ブロックを含む。煙出ビット(新)堆積土。
6	褐褐色(10YR10/0)	シルト	煙出ビット(古)堆積土。
7	褐褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。
8	褐褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。
9	褐褐色(10YR10/0)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。
10	黄褐色(10YR10/0)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。
11	こじ・黄褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。
12	褐赤褐色(10YR10/3)	シルト	地山ブロック・焼土等に炭粒を多量に含む。煙出ビット(古)堆積土。

第15図 SI120豎穴住居跡

地山ブロック、焼土ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルトで、底面上には機能時に堆積した厚さ2mmほどの炭・焼土層がみられる。古い煙出ビットは暗褐色シルト・黒褐色シルトで埋め戻されている。新しい煙出ビットは暗褐色シルト・褐色シルトで埋め戻された上層に暗褐色シルトが堆積している。

【出土遺物】煙道と煙出ビットの堆積土からロクロ調整の土師器小型甕の他、ロクロ調整の土師器環・甕の破片、須恵器甕の破片が出土している。

【SI120豎穴住居跡】(第16図)

II区南東隅で検出した。住居跡南西部は削平されている。SI129豎穴住居跡、SX107焼土遺構と重複し、SI129豎穴住居跡より新しく、SX107焼土遺構より古い。

【平面形・規模】平面形は隅丸長方形と思われる。規模は南北3.6m、東西0.5m以上である。

【方向】東辺でみるとN-23°-Eである。

【壁】東辺で残存している。床面から外側にやや斜めに立ち上がる。高さは残存状況のよい東辺中央部で40cmである。

【床面】住居の東辺北側付近は地山を床面とし、住居の東辺南側は掘り方理土上面を床としている。

【柱穴】1個検出した(P1)。柱痕跡は確認されなかった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺

からロクロ調整の土師器甕(第14図-4)、住居堆積土からロクロ調整の土師器環・甕の破片が出土した。

【SI120豎穴住居跡】(第15図)

II区南半部中央で検出した。SX114豎穴遺構と重複しこれより新しい。近世以降の切土や工事用仮設道路の掘削により遺構の大半が削平され煙道と煙出ビットのみ残存している。

【平面形・規模】全体の形状や規模は不明である。

【カマド】煙道の一部と煙出ビットを検出した。煙道は東側に延びており、幅25cm、深さ15~23cmに地山を掘り抜いて作られており底面は平坦である。煙道の先端に煙出ビットが付設されている。煙出ビットは長径65cm、短径35cmの楕円形を呈し、深さは60cmである。煙出ビットは掘り直され新旧2時期に分かれる。煙出ビットの底面は煙道の底面より、古いビットで12cm、新しいビットで9cm掘り深められている。煙道の堆積土は天井部の崩落土である。

【出土遺物】煙道と煙出ビットの堆積土からロクロ調整の土師器小型甕の他、ロクロ調整の土師器環・甕の破片、須恵器甕の破片が出土している。

【SI120豎穴住居跡】(第16図)

II区南東隅で検出した。住居跡南西部は削平されている。SI129豎穴住居跡、SX107焼土遺構と重複し、SI129豎穴住居跡より新しく、SX107焼土遺構より古い。

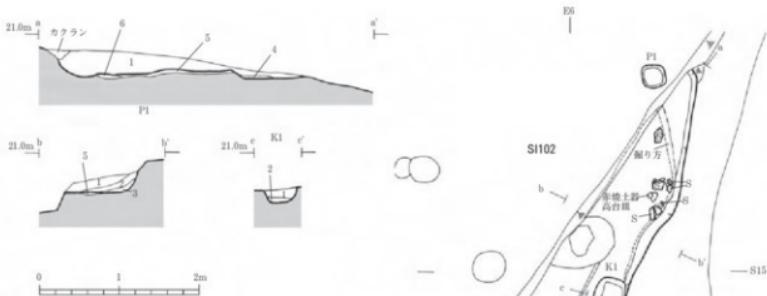
【平面形・規模】平面形は隅丸長方形と思われる。規模は南北3.6m、東西0.5m以上である。

【方向】東辺でみるとN-23°-Eである。

【壁】東辺で残存している。床面から外側にやや斜めに立ち上がる。高さは残存状況のよい東辺中央部で40cmである。

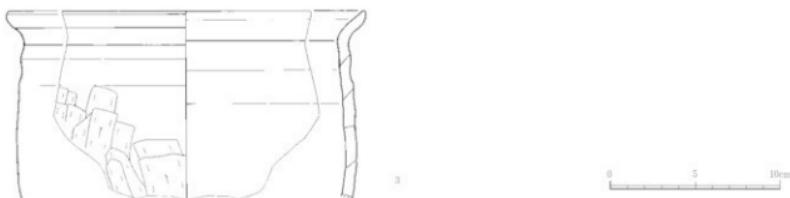
【床面】住居の東辺北側付近は地山を床面とし、住居の東辺南側は掘り方理土上面を床としている。

【柱穴】1個検出した(P1)。柱痕跡は確認されなかった。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺



例	土 色	土 性	備 考
1	黒褐色(10YR2/1)	シルト	地山粒・埴土粒を少量含む。
2	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・埴土粒を含む。
3	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒・埴土粒を多量に含む。
4	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒ブロックを多量に含む。振り方墳土。
5	褐褐色(10YR2/2)	シルト	埴土ブロックを少量含む。振り方墳土。
6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒・埴土粒を僅かに含む。振り方墳土。
S 1.1 0.2 斧藏穴 (K1)			
1	褐褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒・埴土粒・陶片を多量に含む。
2	褐色(10YR4/6)	シルト	地山粒を多量に含む。埴土粒・陶片を僅かに含む。

第16図 SI102竪穴住居跡



%	器 物	層 段	層 順	寸 径	重 量	形 性	残 存	特 徴	分類箇	層 線
1	手摺上器・沿付 壁面直上	(14.8)	2.3	4.6	1/3	内外面:ロクロナデ 底部:側板切替り→高白貼り付け			15-1	SI102-2
2	手摺上器・沿付 壁面直上	(15.7)	2.5	4.2	1/3	内外面:ロクロナデ 底部:側板切替り→高白貼り付け			15-2	SI102-4
3	土器器・壺	(20.9)	(31.1)	1/5	外表面:ロクロナデ→ヘラケズリ 内面:ロクロナデ				15-5	SI102-5

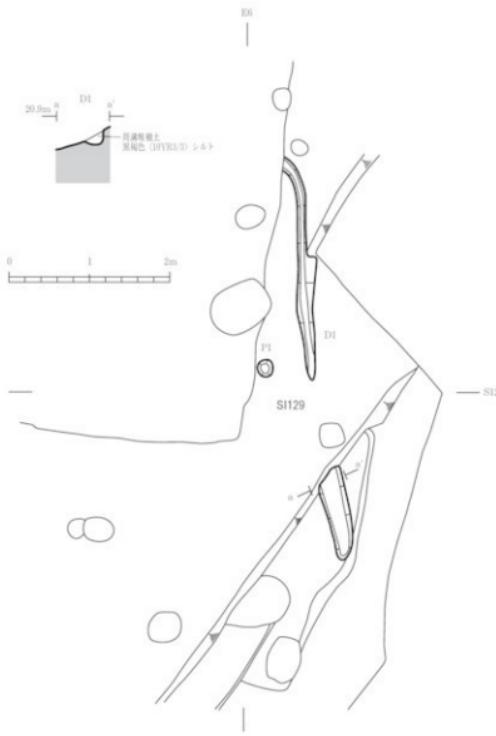
第17図 SI102竪穴住居跡出土土器

40cm、短辺35cm、深さ 5 cm である。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔貯蔵穴〕 南東隅で検出した (K1)。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺60cm、短辺40cm、深さ15cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は焼土粒・地山粒を多く含む黄褐色シルトで自然堆積である。

〔周溝〕 検出されなかった。



第18図 SI129竪穴住居跡

規模は南北5.0m以上である。

〔方向〕 東辺でみるとN-4°-Wである。

〔壁〕 検出されなかった。

〔床面〕 地山を床面としている。

〔柱穴〕 1個検出した(P1)。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺20cm、短辺16cm、深さ15cmである。地山粒を含む暗褐色シルトで埋め戻されている。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 東辺で検出した(D1)。SI101竪穴住居跡と重複する箇所で西に折れ曲がるものと思われる。幅10~20cm、深さ6~21cmで断面形は舟底状である。堆積土は黒褐色シルトで地山粒、焼土粒を含む。

〔堆積土〕 検出されなかった。

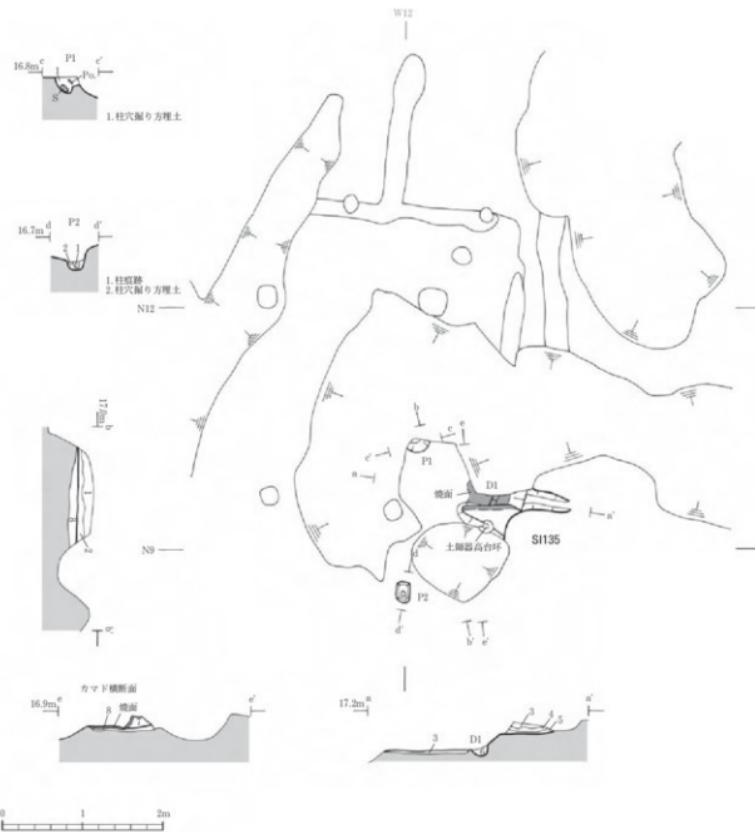
〔堆積土〕 3層に分かれる。1層はSI102・SX107の上に堆積する黒色シルト、2層は暗褐色シルト、3層は褐色シルトである。2・3層より遺物が出土している。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕 床面直上から赤焼土器高台皿(第17図-1・2)、床面からロクロ調整の土師器甕(第17図-3)、K1からロクロ調整の土師器甕が出土した他、堆積土から赤焼土器小型壺やロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

【SI129竪穴住居跡】(第18図)

II区南東隅で検出した。SI101・SI102竪穴住居跡、SX103・SX104焼土遺構と重複しSI102竪穴住居跡、SX103・SX104焼土遺構よりも古く、SI101竪穴住居跡よりも新しい。西半部の大半が削平されている。

〔平面形・規模〕 東辺が部分的に残存するのみで平面形は不明である。



第19図 SI135竪穴住居跡

〔出土遺物〕 床面から赤焼土器高台環の底部が出土した。

【SI135竪穴住居跡】(第19図)

II区南半部西側で検出出した。SI134・SI133竪穴住居跡と重複しSI133竪穴住居跡より新しい。

SI134竪穴住居跡との新旧関係は不明である。風倒木痕により全体が搅乱を受けている。

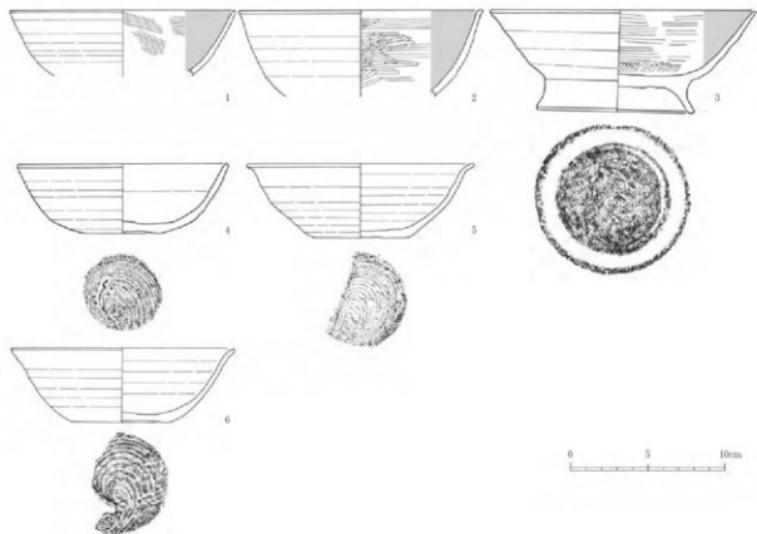
〔平面形・規模〕 平面形は不明である。規模は東西1.6m以上、南北2.1m以上である。

〔方向〕 東辺でみるとN-4°-Eである。

〔壁〕 床面から外側に傾斜して立ち上がる。高さは東辺で20cmである。

〔床面〕 厚さ5~10cmの掘り方埋土上面を床としている。

層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	赤い茶褐色(10YR4/3)	シルト	地山小礫・地土粒・マングン粒を含む。	5	褐色(10YR4/4)	シルト	地山プロット・塵土粒を含む。泥和を多く含む。標準種植。
2	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山小礫・地山粒・地土粒・炭酸・マングン粒を含む。	6	褐褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒・地土粒・炭酸を含む。深溝堆積土。
3	褐褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	炭酸を多量に含む。地山粒を含む。標準堆積土。	7	褐色(10YR4/4)	シルト	地山・地土・炭酸を含む。地山プロットを多く含む。ナツリ頭。
4	褐褐色(10YR4/4)	シルト質粘土	炭酸を多量に含む。地山・地土・炭酸を含む。標準堆積土。	8	赤い茶褐色(10YR4/3)	シルト	地山プロットを多量に含む。解り方埋土。



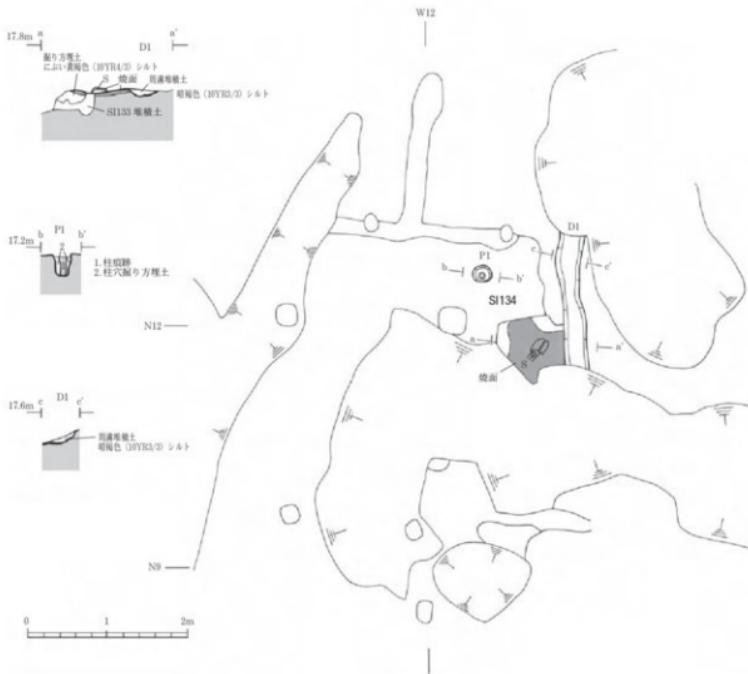
No.	器種	層位	口径	底径	高さ	底面	残存	特徴	年間	登録
1	土器器・杯	奥2層	(14.5)	(3.2)	1/4	外面:ロフロナデ 内面:ヘラカギー黒色焼付			15-16	SI135-2
2	土器器・杯	掘り方埋土	(15.0)	(3.0)	1/4	外面:ロフロナデ 内面:ヘラカギー黒色焼付			15-8	SI135-5
3	三脚器・高台	77-10-01-01	17.1	10.0	6.8	完形	外面:ロフロナデ 内面:ヘラカギー黒色焼付	底部:回転糸切り+高台貼り付け	15-6	SI135-1
4	赤褐色土器・杯	奥1・2層	(13.5)	5.0	4.5	3/5	内外面:ロフロナデ 底部:回転糸切り		15-15	SI135-4
5	泥器器・杯	奥1・2層	(14.0)	5.9	4.8	1/3	内外面:ロフロナデ 底部:回転糸切り		15-13	SI135-3
6	泥器器・杯	奥2層	(13.0)	6.5	4.8	3/5	内外面:ロフロナデ 底部:回転糸切り		15-14	SI135-6

第20図 SI135整穴住居跡出土土器

〔柱穴〕床面で2個検出した(P1・P2)。P1は風倒木痕により北半部が壊されている。平面形はP1が円形、P2が長方形を呈する。規模はP1が径30cm、深さ19cm、P2が長辺26cm、短辺18cm、深さ32cmである。埋土は黒褐色粘土質シルト、黄褐色粘土質シルトである。P1には底面上に被熱により赤変した長さ14cmの礫が含まれている。柱痕跡はP2で認められる。径7cmの円形を呈し、堆積土は黒褐色シルトである。

〔カマド〕東辺に付設されている。右側壁と煙道の一部を検出した。残存している右側壁は長さ65cm、幅40cm、高さは奥壁で26cm、焼き口で14cmである。褐色シルトを積み上げて構築されている。側壁内面とカマド底面は被熱により赤色硬化している。

煙道は奥壁から外側にむかってほぼ水平に延びている。検出した長さは50cmである。地山を幅25cm、深さ15cmに掘り下げて作られている。煙道の堆積土は暗褐色粘土質シルト、明黄褐色粘土質



第21図 SI134堅穴住居跡

シルト、褐色シルトで炭粒、焼土粒、地山粒を含む。自然堆積である。

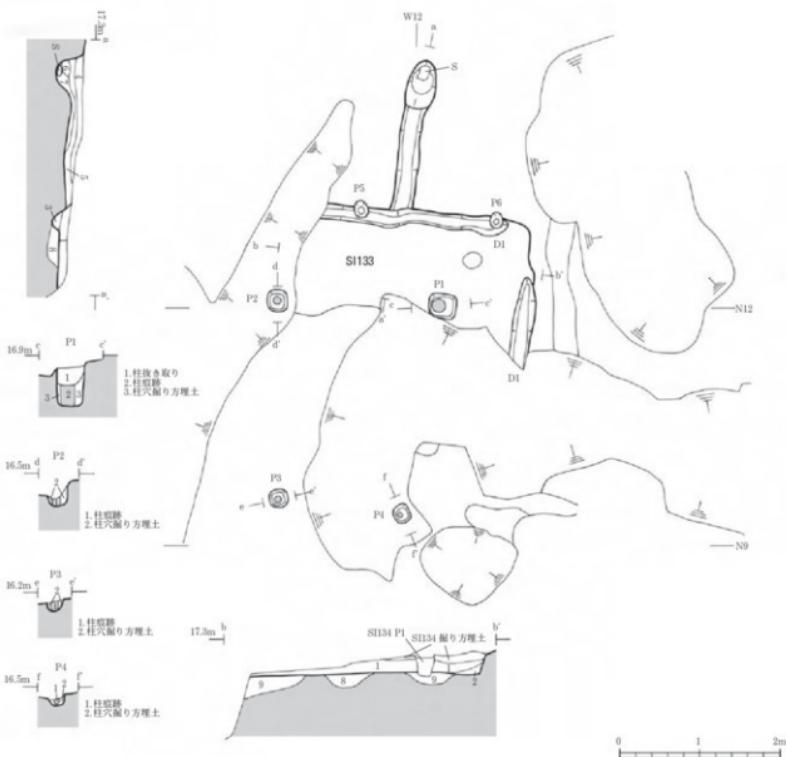
〔貯蔵穴〕 検出されなかった。

〔周溝〕 住居跡東辺で検出した(D1)。幅18cm、深さ12cmで、断面形は半円形である。堆積土は暗褐色粘土質シルトで炭粒、焼土粒、地山粒を含む。自然堆積である。

〔堆積土〕 2層に分かれる。1層はにぶい黄褐色シルトで、地山小礫、焼土粒、マンガン粒を含む。

2層は暗褐色シルトで地山小礫、地山粒、焼土粒、炭粒、マンガン粒を含む。自然堆積である。

〔出土遺物〕 カマド右側壁上の堆積土2層中から土師器高台壺(第20図-3)、掘り方埋土から土師器壺(第20図-2)が出土した他、堆積土から土師器壺(第20図-1)・甕、赤焼土器壺(第20図-4)、須恵器壺(第20図-5)・甕が出土した。土師器はすべてロクロ調整されている。またカマドを



層	上色	土性	層号	層	上色	土性	層号
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	堆山粘・砂土粘・炭灰を含む。	6	こぶし黒褐色(10YR3/3)	シルト	堆山堆積物・砂土を含む。壁面にコット有無。
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	堆山小プロックを多量に含む。崩落土。	7	褐色(10YR4/3)	シルト	堆山粘・小砂・崩土和・木炭灰を含む。壁面にコット有無。
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	堆山粘・炭灰を含む。周溝堆積。	8	褐色(10YR4/3)	シルト	砂土プロック・木炭灰・堆山小プロックを含む。崩落土。
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	堆山小プロック・礁土を含む。堆溝堆積。	9	黒褐色(10YR2/2)	粘土質シルト	堆山プロックを多量に含む。崩落土。
5	黒褐色(10YR4/3)	シルト	堆山小砂・砂・礁土粘・礁土を含む。堆溝堆積。				

第22図 SI133竪穴住居跡

切る搅乱から須恵器杯（第20図-6）が出土した。

【SI134竪穴住居跡】（第21図）

II区南半部西側で検出した。SI135・SI133竪穴住居跡と重複しSI133竪穴住居跡より新しい。SI135竪穴住居跡との新旧関係は不明である。風倒木痕による搅乱のため残存状況は極めて悪い。

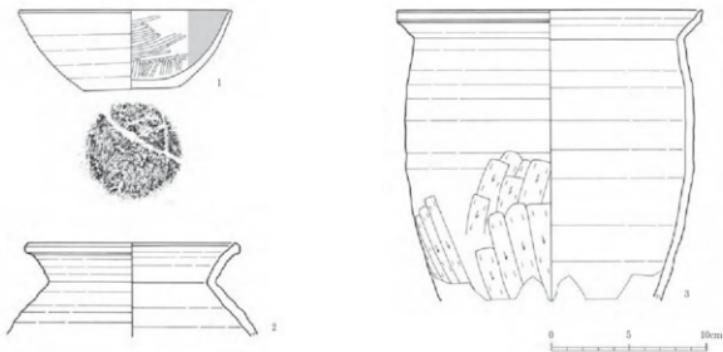
【平面形・規模】 平面形は不明である。規模は東西2.0m以上、南北1.6m以上である。

【方向】 東辺でみるとN-2°-Wである。

【壁】 検出されなかった。

【床面】 検出されなかった。

【柱穴】 1個検出した（P1）。平面形は楕円形を呈し、規模は長径23cm、短径20cm、深さ27cmであ



第23図 SI133竪穴住居跡出土土器

る。埋土は暗褐色シルトで、地山粒、焼土粒、炭粒を含む。柱痕跡は径8cmの円形を呈し、堆積土は暗褐色シルトで地山粒、焼土粒、炭粒を含む。

【カマド】住居跡の東辺に付設されている。東西60cm、南北80cmの範囲で焼面を検出しており、カマド燃焼部の痕跡とみられる。焼面上には被熱によって赤変した長さ20cmほどの礫が3個見つかっておりカマドの構築材と思われる。

【貯蔵穴】検出されなかった。

【周溝】住居跡東辺で検出した(D1)。幅20~30cm、深さ6~9cmで、断面形は舟底状である。堆積土は暗褐色シルトで焼土粒、炭粒、地山粒を含む。

【堆積土】検出されなかった。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

【SI133竪穴住居跡】(第22図)

II区南半部西側で検出した。SI134・SI135竪穴住居跡と重複し、これらより古い。北西隅と南半は風倒木痕や擾乱のため壊されている。

【平面形・規模】南北に長い長方形となるものと考えられる。規模は東西4.5m、南北5.0mである。

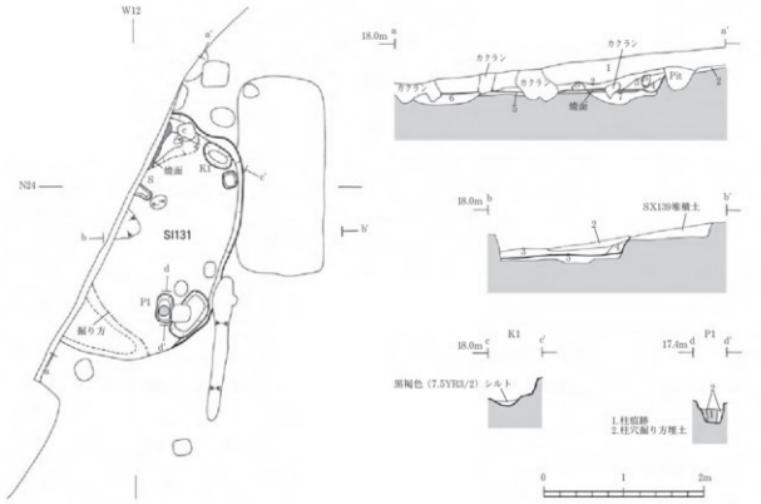
【方向】北辺でみるとW-6°-Nである。

【壁】床面から直立気味に立ち上がる。高さは東辺で28cmである。

【床面】地山を床面とするが、住居跡東側と西側では厚さ15~25cmの掘り方埋土上面を床とする。

【柱穴】主柱穴を4個検出した(P1~P4)。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長辺22~35cm、短辺18~33cm、深さ14~55cmである。P1では柱が抜き取られている。埋土は明黄褐色粘土質シルト、黄

No.	面	横	縦	口徑	底径	深さ	残	作	等	回	等	回
1	上部器・柱	東1側~東側上	13.6	6.0	3.2	1/2	外面:ロクロナデ 内面:ヘラミガキ・黒色焼附 埋土:回転木切り			16-1	SI133-1	
2	下部器・柱	東1側~東側上	13.20	6.01	3.8~3.85	9.00	外面:ロクロナデ・自然転伏着 内面:ロクロナデ			16-2	SI133-2	
3	下部器・柱	東1側	12.61	6.08	3.5	14.77	外面:ロクロナデ→ラミナリテ・下部に羅付着 内面:ロクロナデ			16-3	SI133-3	



第24図 SI131 穴住居跡

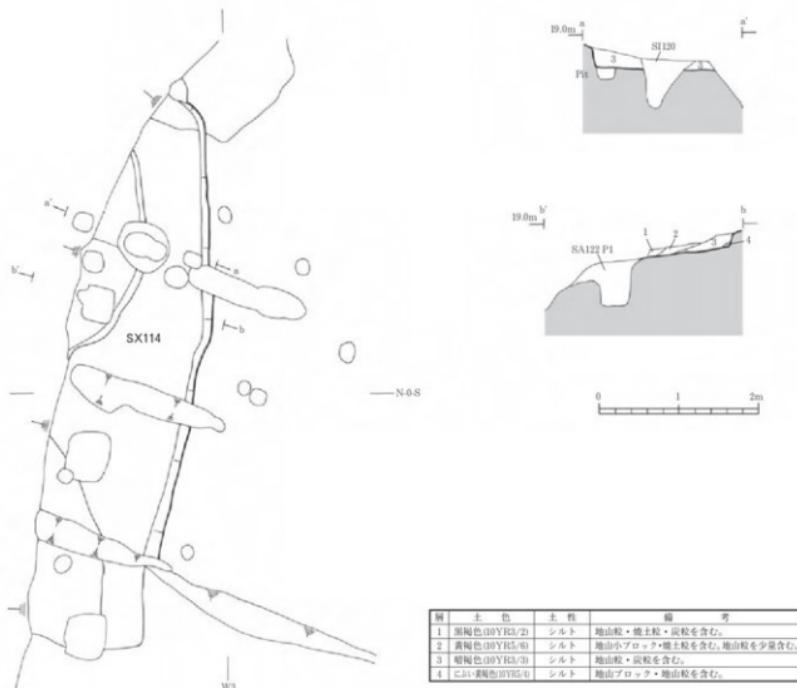
褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトで地山ブロック、礫、炭粒、焼土粒を含む。すべての柱穴に柱痕跡が認められる。柱痕跡は径7~18cmの円形を呈し、堆積土は暗褐色シルト・粘土質シルト、黒褐色シルトである。柱間寸法はP1・P2間が2.0m、P2・P3間が2.55m、P3・P4間が1.6m、P4・P1間が2.7mである。住居跡北辺では2個の壁柱穴を検出した(P5・P6)。いずれも径20cmほどの円形を呈し、深さは22~39cmである。埋土は地山粒、炭粒、焼土粒を含む黒褐色シルトである。

〔カマド〕住居跡北辺に付設されている。煙道と煙出ピットのみ残存している。煙道はカマド奥壁から外側に向かって1.2m延びておりその先端に煙出ピットが掘り込まれている。煙道は幅25cm、深さ10~15cmの長方形に地山を掘り下げて作られており、底面はやや起伏をもちながら煙出ピットに向かって緩やかに高くなっている。煙出ピットは長径60cm、短径35cm、深さ33cmの楕円形で煙道の底面より18cm掘り窪められている。煙道と煙出ピットの堆積土は暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルト、褐色シルトで地山粒、地山小礫、焼土粒、炭粒を含む。煙出ピットの底面からは長さ20cm、幅17cm、厚さ5cmの扁平な礫が検出されている。

〔貯蔵穴〕検出されなかった。

〔周溝〕北辺と東辺の一部で検出した(D1)。幅16~26cm、深さ7~12cmで、断面形は逆台形である。堆積土は地山粒、炭粒を含む黒褐色シルトである。

〔堆積土〕2層に分かれ。1層は地山粒、焼土粒、炭粒を含む黒褐色シルト、2層は地山小ブロックを多量に含む黒褐色シルト質粘土で壁の崩落土と考えられる。



第25図 SX114堅穴遺構

【出土遺物】住居跡の堆積土・床面上から土師器壊（第23図-1）・甕（第23図-3）、赤焼土器高台壺、須恵器甕（第23図-2）・壺、煙道の堆積土から土師器壊・甕の破片、掘り方埋土から土師器甕の破片が出土した。土師器はすべてロクロ調整されたものである。

【SI131堅穴住居跡】（第24図）

II区西側で検出した。SX139堅穴遺構・SA130柱列と重複しSX139堅穴遺構より新しく、SA130柱列より古い。遺構の西半部は調査区外に延びている。

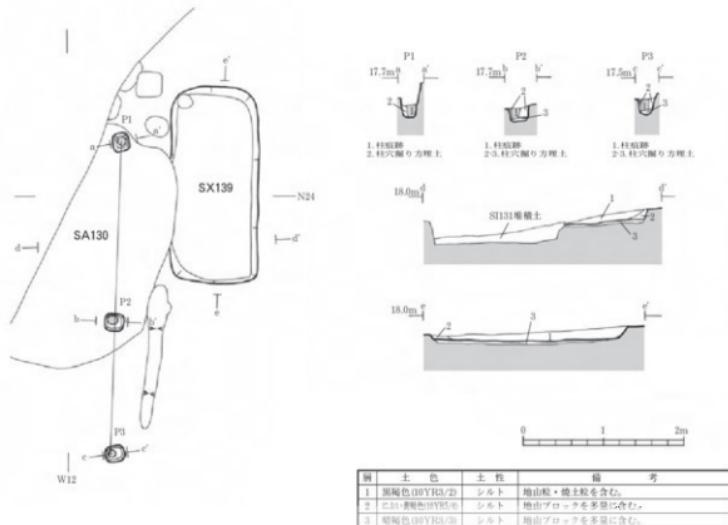
【平面形・規模】平面形は不整な方形を呈する。規模は東西1.4m以上、南北3.2mである。

【方向】東辺でみるとN-23°-Eである。

【壁】東辺で残存している。床面からほぼ垂直に立ち上がる。高さは最も残りの良い東辺中央部で20cmである。

【床面】住居の東側では地山を床面とし、調査区西壁では掘り方埋土上面を床としている。

【柱穴】1個検出した（P1）。平面形は長方形を呈し、規模は長辺35cm、短辺20cm、深さ25cmである。掘り方埋土は地山ブロックを含む暗褐色シルトである。柱痕跡は直径12cmの円形で堆積土は黒褐色シルトである。



第26図 SX139竪穴遺構・SA130柱列

〔カマド〕住居北辺の調査区西壁付近で焼面を確認した。

〔貯蔵穴〕北東隅で貯蔵穴と思われる土壤を検出した(K1)。平面形は梢円形を呈し、規模は長径40cm、短径25cm、深さ10cmである。断面形は皿状を呈する。堆積土は、地山粒を含む黒褐色シルトで自然堆積である。

〔周溝〕検出されなかった。

〔堆積土〕4層に分かれ。1層は褐色シルト、2層は地山粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルト、3層は地山粒、焼土粒、炭粒を含む黒褐色シルト、4層は地山粒・ブロックを含むにびい黄褐色シルトである。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整の土師器甕の破片が出土した。

2. 竪穴遺構

本来は竪穴住居跡であった可能性が考えられるものの、床面、カマド、柱穴、貯蔵穴、周溝などの住居に伴う施設が認められなかったことから竪穴遺構として記載するものである。

【SX114竪穴遺構】(第25図)

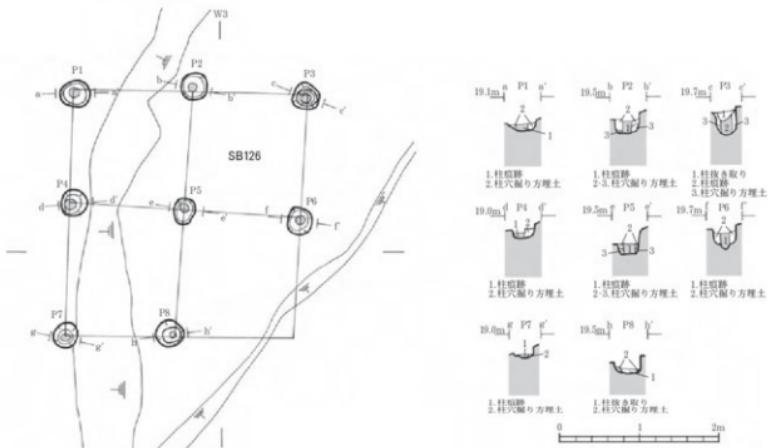
II区南半部中央で検出した。SII120竪穴住居跡、SA122柱列と重複しこれらより古い。遺構の西半部が後世の切土と工事用仮設道路の掘削により壊されている。

〔平面形・規模〕平面形は不明である。規模は東西1.7m以上、南北5.5m以上である。

〔方向〕東辺でみるとN-12°-Eである。

〔壁〕底面から直立して立ち上がる。高さは東辺で25cmである。

〔堆積土〕4層に分かれ。1層は地山粒、炭粒、焼土粒を含む黒褐色シルト、2層は地山粒・ブ



第27図 SB126掘立柱建物跡

ロック、焼土粒を含む黄褐色シルト、3層は地山粒、炭粒を含む暗褐色シルト、4層は地山粒・ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。

〔出土遺物〕 挖り方理土から回転糸切り無調整の須恵器壺が出土した他、堆積土からロクロ調整の土器壺・甕、須恵器壺の破片が出土した。

【SX139竪穴遺構】(第26図)

II区西側で検出した。SI131竪穴住居跡と重複しこれより古い。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸長方形である。規模は東西1.0m、南北2.4mである。

〔方向〕 東辺でみるとN-0°-Eである。

〔壁〕 東辺で残存している。底面からやや斜めに立ち上がる。高さは東辺で20cmである。

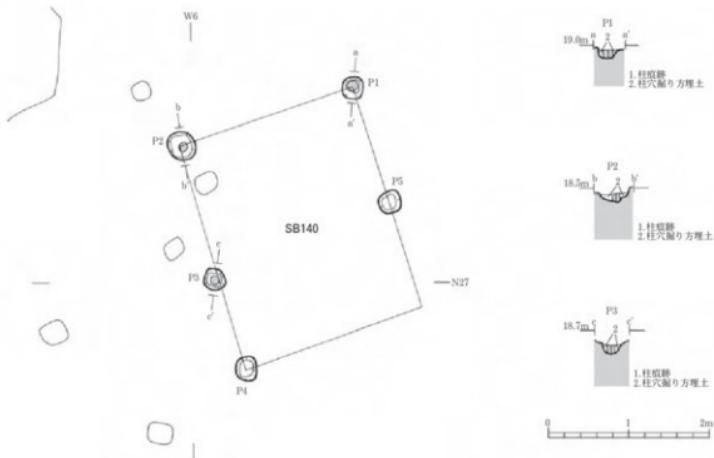
〔堆積土〕 3層に分かれる。1層は黒褐色シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、3層は暗褐色シルトである。1・2層は自然堆積、3層は人為堆積である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

3. 掘立柱建物跡

【SB126掘立柱建物跡】(第27図)

II区北西部西側で検出した。他の遺構との重複はない。南東部が削平され柱穴1個が壊されているため、検出された柱穴は8個である(P1~P8)。南北2間、東西2間の総柱建物である。規模は、桁行が西側柱列で総長3.05m、梁行が北側柱列で総長2.9mである。柱間寸法は東1列目が北から1.5m、2列目が北から1.5m、1.6m、3列目が北から1.4m、1.65mである。建物方向は西側柱列でみるとN-2°-Eである。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、規模は長辺30~37cm、短辺21~32cm、深さ



第28図 SB140掘立柱建物跡

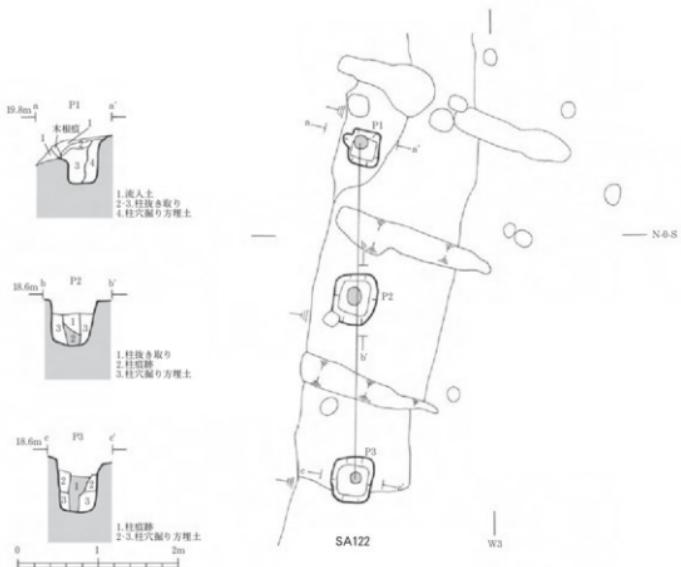
13~36cmである。掘り方埋土は地山ブロックを多く含む褐色シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。すべての柱穴に柱痕跡が認められる。柱痕跡は径11~14cmの円形で、堆積土は地山粒、焼土粒、炭粒を含む黒褐色シルトである。P3、P8には抜き取り穴が伴う。抜き取り穴の堆積土は地山粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルト、黒褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

【SB140掘立柱建物跡】(第28図)

II区の北半部西側で検出した。他の遺構との重複はない。5個の柱穴で構成される(P1~P5)。桁行2間、梁行1間の南北棟の建物である。南東隅の柱穴は検出されなかった。規模は、桁行が西側柱列で総長3.0m、梁行が北側柱列で総長2.25mである。柱間寸法は西側柱列で北から1.7m、1.3m、東側柱列で1.6mである。建物方向は西側柱列でみるとN-16°-Wである。柱穴の平面形は隅丸方形で、規模は長辺26~35cm、短辺24~32cm、深さ11~25cmである。掘り方埋土は、地山粒・ブロック、黒色土ブロックを含む暗褐色シルトである。P1~P3にはいずれも径12cmの円形の柱痕跡が伴う。柱痕跡の堆積土は地山粒・ブロックを含む褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

【SB141掘立柱建物跡】(第2図)

II区南西隅で検出した。他の遺構との重複はない。4個の隅柱となる柱穴を検出した他、東辺で1個、南辺で2個、間柱となる柱穴を確認した。東辺の間柱と南辺西よりの間柱にはそれぞれ径20cmの円形を呈する扁平な蹠が礎石状に据えられている。桁行3間、梁行3間の歪んだ方形をした東西棟の建物跡である。規模は東辺5.5m、西辺6m、北辺6m、南辺6.5mである。建物方向は東辺でN-25°-Eである。丘陵西側斜面を東側と北側より切土したのちに建てられていることから、近世以降の建物と考えられる。



第29図 SA122柱列

4. 溝 跡

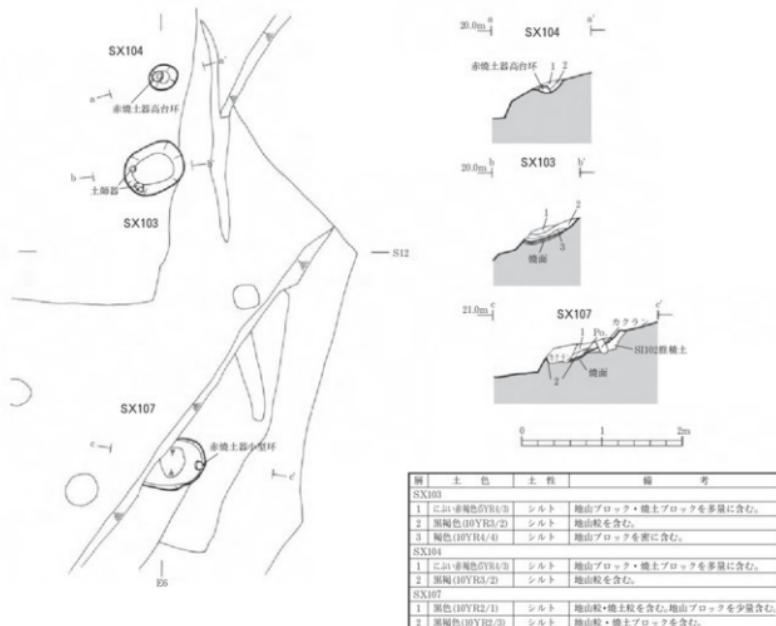
【SD142溝跡】(第2図)

II区南半部西側で検出した。他の遺構との重複はない。規模は検出総長10m、幅15~30cm、深さ5cm~10cmで断面形はU字形である。堆積土は暗褐色シルトである。SB141掘立柱建物跡の北側柱列から1.8m離れて東西に平行に延びていることから、建物に付属する雨落ち溝と考えられる。

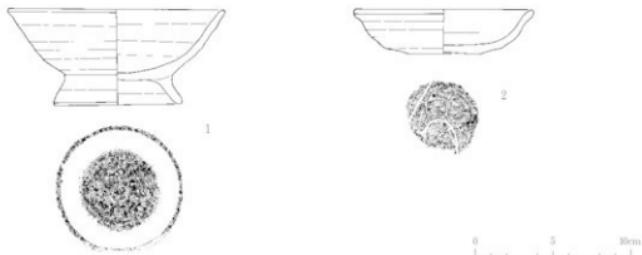
5. 柱 列

【SA122柱列】(第29図)

II区の南側で検出した。SX114竪穴遺構と重複しこれより新しい。柱穴は3個確認した(P1~P3)。方向はN-2°-Eである。検出総長は4.2m、柱間寸法は北から1.9m、2.3mである。柱穴の平面形は、隅丸方形、隅丸長方形を呈する。規模は長辺44~65cm、短辺44~55cm、深さ54~66cmである。掘り方埋土は地山ブロックを多く含む黄褐色シルトである。すべての柱穴に柱痕跡が認められる。柱痕跡は径14~18cmの円形で、堆積土は地山粒・小ブロックを含む褐色シルトである。P1には抜き取り穴が伴い、P2も柱の抜き取られた痕跡がある。抜き取り穴の堆積土は地山粒・ブロックを含む暗褐色シルト、褐色シルトである。遺物は出土しなかった。



第30図 SX103・SX104・SX107焼土遺構



層	器種	層位	口径	底径	基高	残存	特徴	写真場	登録
1	赤燒土器・高台环	底面	15.0	8.2	6.3	完形	内外面:ロクロナデ 底部:回転粘り一尚白粘り付け	16-6	S104-1
2	赤燒土器・小型环	堆土層 堆土層	(11.0)	5.6	2.9	1/2	内外面:ロクロナデ 底部:回転粘り	16-7	S107-1

第31図 SX104・SX107焼土遺構出土土器

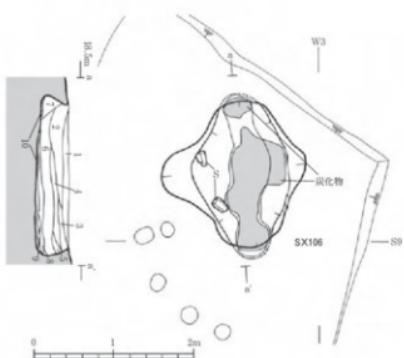
【SA130柱列】(第26図)

II区の西側で検出した。SI131竪穴住居跡と重複しこれより新しい。柱穴は3個確認した(P1~

P3)。方向は真北である。検出総長は4.0m、柱間寸法は北から2.3、1.7mである。柱穴の平面形は隅丸方形、隅丸長方形を呈する。規模は長辺25cm、短辺20cm、深さ20~25cmである。掘り方埋土は地山粒・ブロックを含むにぶい黄褐色シルトである。すべての柱穴に柱痕跡が認められる。柱痕跡は径10~12cmの円形を呈し、堆積土は地山粒、焼土粒、炭粒を含む暗褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

6. 焼土遺構

【SX103焼土遺構】(第30図)



層	土色	土性	備考
1	赤褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒・焼土粒・炭粒を含む。
2	赤褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒を多量に含む。焼土粒・炭粒を少量含む。
3	赤褐色(10YR5/4)	シルト	地山粒を少量含む。
4	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む。
5	赤褐色(10YR5/40)	シルト	地山ブロックを多量に含む。焼土粒・炭粒を含む。
6	赤褐色(10YR5/2)	シルト	地山粒を多量に含む。焼土粒・炭粒を含む。
7	赤褐色(10YR5/40)	シルト	地山ブロックを含む。
8	赤褐色(10YR5/1)	シルト	灰分を多量に含む。
9	赤褐色(10YR5/1)	シルト	炭灰を僅かに含む。
10			

第32図 SX106焼土遺構

シルト、2層は地山粒を含む黒褐色シルトである。底面から赤焼土器高台環(第31図-1)が倒位の状態で出土した。

【SX107焼土遺構】(第30図)

II区南東隅で検出した。SI102竪穴住居跡と重複しこれより新しい。遺構の西半部は削平されている。平面形は梢円形を呈するものと思われる。規模は長辺60cm以上、短辺60cm、深さ33cmである。断面形は皿状で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれれる。1層はSI102堆積土とSX107を覆うように堆積している黒色シルト、2層は地山粒、焼土ブロックを含む黒褐色シルト

II区南東隅付近で検出した。SI101竪穴住居跡と重複しこれより新しい。平面形は梢円形を呈し、規模は長辺75cm、短辺60cm、深さ25cmである。断面形は皿状で、壁は底面から外側に斜めに立ち上がる。堆積土は3層に分かれれる。1層は地山ブロック、焼土ブロックを多く含むにぶい赤褐色シルト、2層は地山粒を含む黒褐色シルト、3層は地山ブロックを含む褐色シルトである。底面は被熱により赤色硬化している。堆積土からロクロ調整の土師器窯の破片が出土した。

【SX104焼土遺構】(第30図)

II区南東隅付近で検出した。SI101竪穴住居跡と重複しこれより新しい。平面形は梢円形を呈し、規模は長辺35cm、短辺30cm、深さ15cmである。断面形は半円形で、壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれれる。1層は地山ブロック、焼土ブロックを多く含むにぶい赤褐色

である。底面は被熱により赤色硬化している。2層から赤焼土器小型壺（第31図-2）が出土した。

【SX106焼土遺構】（第32図）

II区東半部南側で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は膨らんだ十字状を呈し、規模は長軸2.0m、短軸1.8m、深さ60cmである。断面形は、南北の壁面がオーバーハングし、袋状を呈する。底面は平坦である。堆積土は10層に分かれる。1・3層は暗褐色シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、4層は褐色シルト、5・7層は黄褐色シルト、6・8・9層は黒褐色シルト、10層は炭の集積層である。1～9層は自然堆積である。底面から礫を検出した以外に遺物は出土しなかった。

IV 考 察

1. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器などの古代の土器類を中心で、その他に繩文土器、陶磁器、鉄製品、石製品、鉄滓などが少量含まれている。本項では、出土遺物の大半を占める土師器、須恵器、赤焼土器について遺構毎にその特徴を記述し、年代的な位置付けを行っていくこととする。

(1) 壺穴住居跡出土土器

①SI101壺穴住居跡出土土器

床面直上から非ロクロ調整の土師器壺2個体・瓶1個体が出土している。

壺は口縁部に最大径をもつ長胴壺である。口縁部はいずれも外反する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケメ・ヘラナデ、体部内部ハケメ・ヘラナデである。口縁部と体部の境に段をもつものとならないものがある。大きさは口径19.9～21.8cm、器高は、残存高が6.1～14.0cmである。

瓶は、口縁部がわずかに外傾しながら立ち上がる。調整は口縁部内外面ヨコナデ・ハケメ、体部外面ハケメ、体部内部ハケメ・ヘラナデである。口縁部と体部の境に段をもつ。底部は平底で外面をヘラケヅリしたのち径7～10mmの円形をした6個の小孔を棒状の工具を用いて外側から焼成前に穿孔している。大きさは口径18.3cm、器高16.3cm、底径10.3cmである。

このような特徴をもった土師器の壺は、河北町新田東遺跡I群土器（県教委2003）、同沢田山西遺跡SI25住居跡出土土器（県教委2004）にその類例が求められ、8世紀第3四半期頃に位置付けられている。また同様の特徴をもった壺と有底多孔式の瓶を共伴する例としては志波姫町糠塚遺跡第16号住居跡出土土器（県教委1978）があり、年代については国分寺下層式期と捉えている。よってSI101出土土師器の年代は概ね8世紀中頃から後半頃と考えられる。

②SI105壺穴住居跡出土土器

床面やカマド底面からまとまった状態で土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。土師器は製作にロクロを使用するもので、壺4個体・甕3個体がある。須恵器には壺、赤焼土器には高台壺がそれぞれ1個体ある。

土師器壺は底部が平底で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直線的に外傾するかわずかに

外反する。調整は外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りでその後の調整はなされていない。大きさは口径13.6～15.1cm、底径5.1～6.4cm、器高4.5～5.5cmである。口径に対する底径の比率（以下底口比と略す）は0.37～0.42、口径に対する器高の比率（以下高口比と略す）は0.33～0.39である。

土師器甕は口縁部あるいは体部上半部に最大径をもつ長胴甕である。体部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し、口縁端部が短く直立する。調整は体部外面が全面へラケズリされているものと体部中央から下半部にかけてへラケズリされているものに分かれる。底部周縁に平行タタキされているものがある。体部内面はヘラナデにより再調整の施されているものがある。大きさは口径20.9～21.9cm、底径8.5cm、器高34.4cmである。

須恵器甕は平底で体部が丸みをもって立ち上がり口縁部はわずかに外反する。底部の切り離しは回転糸切りで再調整は施されていない。大きさは口径16.0cm、底径6.7cm、器高5.1cmで、底口比は0.42、高口比は0.32である。

赤焼土器高台甕は、体下部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、外に開く高い高台が付けられている。大きさは口径12.9cm、底径6.7cm、器高5.1cmである。

以上の土器類について特徴を考えると、①土師器、須恵器の甕は切り離し技法が回転糸切りで再調整はなされない②底口比が0.37～0.42と口径に対する底径の比が1/2をきる③赤焼土器高台甕が土器類に含まれる、といった点が指摘できる。ところで赤焼土器については、多賀城跡出土土器群中、須恵系土器に該当するものである。多賀城跡では出土土器群中D群土器から須恵系土器の初源的形態が出現するようになりその年代は9世紀後半と言わわれている（註1）。その後官衙から一般の集落に赤焼土器が普及していくのは、9世紀後葉以降とみられている。土師器については製作にロクロを使用することから表杉ノ入式期の範疇に入るものである。表杉ノ入式の土師器については甕類の製作技法の変化によってその変遷が提示されており、年代が降るにしたがって、切り離し技法が回転ヘラ切りから回転糸切りへと変化し、切り離し後の再調整も見られなくなる。また底口比が減少していく傾向を示す（註2）。SI105出土土器甕は切り離し技法や底口比の値などから当該期の土師器の中でも新しい傾向を示している。表杉ノ入式期の土師器のうち須恵器や赤焼土器を共伴するものとしては河北町新東遺跡II B群土器、多賀城市高崎遺跡第11次調査SX1080土器廃棄土壙出土土器群（多賀城市教委1995）、多賀城市山王遺跡第9次千刈田地区SX543土器廃棄土壙出土土器群（多賀城市教委1991）、仙台市燕沢遺跡第8次調査SI3竪穴遺構出土土器群（仙台市教委1995）などにその類例が求められ10世紀前葉頃とみられている。ただしSI105は10世紀前葉と考えられる灰白色火山灰の降下後に構築されている。よってSI105出土土器については10世紀前葉頃でも灰白色火山灰降下以降の年代が与えられる。

土師器甕の中には底部周縁に平行タタキを施して成形を加えているものが認められる。管見の限りでは同時期の在地の土師器甕にそのような特徴は見出せない。土師器甕でロクロ調整後に器面を削りタタキを施して体部下から底部にかけてすぼませるといった製作様式は会津地方で普及していた技法とされる（註3）。県内ではやや年代が遅るが桃生町角山遺跡SI1013竪穴住居跡出土土器（本報告

書所収)、栗原市原田遺跡31号竪穴住居跡出土土器(県教委2006)に類例がある。本遺跡と会津地方との間に人的・物的交流の行われていた可能性も含め、更なる類例の増加をまって今後の検討課題としていきたい。

③SI116竪穴住居跡出土土器

住居に直接伴う土器としてロクロ調整の土師器壺3個体・甕1個体、須恵器甕1個体が出土している。

土師器壺は平底で体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は直線的に外傾するかわざかに外反する。調整は外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで再調整はなされない。大きさは口径13.4~15.7cm、底径6.7~8.0cm、器高4.8~5.2cmである。底口比は0.50~0.51、高口比は0.33~0.36である。

土師器甕は体部下端から底部のみ残存するもので体部・底部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデされている。大きさは底径7.2cm、残存高3.1cmである。

須恵器甕は平底で口縁部と体部の境は「く」字状に屈曲し口縁部に向かって緩やかに外反する。口縁端部の突帯は断面形が三角形となる。体部はやや細長い球胴形で体部の最大径はその上半部にくる。調整は体部外面上半部および下端部が平行タタキされ体部中央から下半にかけてヘラケズリされている。体部内面下半部はヘラナデされている。大きさは口径19.0cm、底径11.5cm、器高36.1cm、体部最大径30.4cmである。

SI116出土土器の特徴をみると、①土師器は製作にロクロを使用し、壺の切り離し技法は回転糸切りのみでその後の調整はなされていない②底口比が0.50~0.51とSI105に比べ相対的に大きな値を示す③赤焼土器を共伴していない、といった点が指摘しうる。表杉ノ入式期の土師器で壺の切り離しが回転糸切り無調整を主体とし赤焼土器を共伴していないものとしては、河北町新田東遺跡II A群土器、瀬峰町大境山遺跡23号住居跡出土土器(瀬峰町教委1983)、仙台市燕沢遺跡第9次調査SI14竪穴遺構出土土器群(仙台市教委1996)があり9世紀後葉頃に位置付けられている。またSI116には堆積土に10世紀前葉に降下したと考えられている灰白色火山灰の堆積層がみられ、住居は10世紀前葉以前には廃絶している。以上の諸点からSI116出土土器については灰白色火山灰が降下した10世紀前葉より以前でも赤焼土器を共伴しない9世紀後葉を中心とした年代が与えられる。

④SI117竪穴住居跡出土土器

ロクロ調整の土師器壺1個体・甕1個体、須恵器壺1個体がカマド周辺から出土した他、床面直上から須恵器壺1個体が出土している。

土師器壺は平底で体部が丸みをもって直立気味に立ち上がり口縁部は外反しない。調整は外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。底部は回転糸切りでその後に調整は施されていない。大きさは口径11.8cm、底径6.1cm、器高5.4cmで、底口比0.52、高口比0.46である。底口比、高口比はやや大きい傾向にある。

土師器甕は底部から体部下半にかけて残存するもので体部外面は平行タタキ・ヘラケズリ、内面はヘラナデ・ナデにより調整されている。大きさは底径6.9cm、残存高5.3cmである。

須恵器坏は体部が丸みをもって立ち上がり口縁部が直線的に外傾するものと外反するものに分かれ。底部の切り離しはいずれも回転糸切りでその後に調整は施されていない。大きさは口径13.2～14.6cm、底径5.4～6.0cm、器高4.3～4.9cmで、底口比が0.41、高口比が0.29～0.37である。

SI117出土土器については、赤焼土器を共伴せず、土師器坏・須恵器坏の底部切り離し技法が回転糸切りでその後に調整が施されていないことから9世紀後半頃の年代が考えられる。

⑤SI102竪穴住居跡出土土器

床面直上から赤焼土器高台皿2個体と床面からロクロ調整された土師器甕1個体が出土している。赤焼土器高台皿は体部が丸みをもって立ち上がり口縁部が軽く外反し外面に稜のある低い高台が付くものと、口縁部にかけて直線的に外傾し外側に開く高い高台の付くものに分かれる。底部はいずれも回転糸切りで低い高台の付くほうには切り離し後にナデが施される。大きさは口径14.8～15.7cm、底径7.3～7.5cm、器高4.2～4.6cmである。

土師器甕は口縁部に最大径をもつ長胴甕である。体部と口縁部の境が「く」字状に屈曲し口縁端部が丸みを帯びて短く直立する。体部外面はヘラケズリされている。大きさは口径20.9cm、残存高11.1cmである。

赤焼土器高台皿は、灰釉陶器の模倣形態で、類似の資料は安久東遺跡第1・2号住居跡出土土器群（県教委1980）に求められる。年代は10世紀前葉前後とされておりSI102出土赤焼土器高台皿も概ね10世紀前葉頃の年代が考えられる。

⑥SI135竪穴住居跡出土土器

カマド右側壁上の堆積土2層中からロクロ調整の土師器高台坏1個体が出土している。体部下半は丸みをもち上半から口縁部にかけて直線的に外傾しながら立ち上がる。調整は外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されており、底部の切り離しは回転糸切りである。高台は付け高台で高く外側に開く形態のものである。大きさは口径17.1cm、底径10.0cm、器高6.8cmである。このような土師器高台坏については、河北町新田東遺跡で赤焼土器を伴わないII A群土器と赤焼土器を伴うII B群土器に見出しうるもので、その年代はそれぞれ9世紀後葉頃と10世紀前葉頃に比定されている。SI135出土土師器高台坏は、赤焼土器との共伴関係を明確に捉えられないことから、年代は9世紀後葉～10世紀前葉頃と捉えておきたい。

(2) その他の遺構出土土器

SX104焼土遺構の底面から赤焼土器高台坏1個体、SX107焼土遺構の堆積土から赤焼土器小型坏1個体が出土している。

SX104出土の赤焼土器高台坏は体部が丸みをもって立ち上がり口縁部が軽く外反し外側に開く高い高台の付くものである。大きさは口径13.9cm、底径8.2cm、器高6.3cmである。SI105出土赤焼土器高台坏と特徴が類似することから10世紀前葉頃のものと思われる。

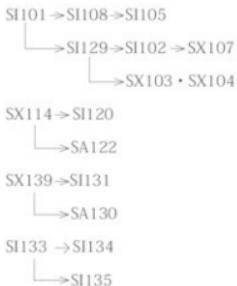
SX107出土の赤焼土器小型坏は、体部が丸みをもって立ち上がる。口縁部は外反し肥厚する。底部の切り離しは回転糸切りである。大きさは口径11.4cm、底径4.6cm、器高2.9cmである。多賀城跡第61次調査第7層出土土器群（多賀城研1991）に類例が見出されることから10世紀中頃のものと思われる。

2. 遺構

今回の調査で発見された遺構は、堅穴住居跡12軒、堅穴遺構2軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、柱列2条、焼土遺構4基、ピット多数である。このうち近世以降と考えられる掘立柱建物跡1棟、柱列1条、溝跡1条など若干の遺構を除くと大半が古代に属する。本項ではこれらの古代の遺構について検討を加えていくこととする。

(I) 遺構の年代について

古代の遺構で重複関係の認められるものは以下の通りである。



上記の遺構群中、堆積土中に灰白色火山灰の含まれるものは、SI101、SI108、SI105、SI116である。ただしSI105は、SI108より新しいことからSI105の堆積土中に含まれる灰白色火山灰は、降灰後住居周辺に滞留していた火山灰が再堆積したものと考えられる。

出土土器から年代の推定が可能なものは以下の遺構である。

- 〔8世紀中頃～後半〕・・・SI101
- 〔9世紀後半〕・・・SI116・SI117
- 〔9世紀後葉～10世紀前葉〕・・・SI135
- 〔10世紀前葉～前半〕・・・SI105・SI102
- 〔10世紀前半～中頃〕・・・SX104
- 〔10世紀中頃〕・・・SX107

SI108・SI120・SI129・SI131・SI133・SI134堅穴住居跡、SX114・SX139堅穴遺構、SX103焼土遺構については他の遺構との重複関係や限られた出土遺物から年代を推定せざるをえない。

SI108・SI120はカマド・煙道からロクロ土師器壺が出土している。ただし堆積土中に含まれる土師器壺の破片資料は、全て切り離しが回転糸切りでその後に調整が施されていないこと、調査区内において底部切り離し後に再調整を施した土師器壺が認められないことから、年代は9世紀後半頃と考えられる。

SI133は、底部の切り離しが回転糸切りでその後に調整の施されないロクロ土師器壺を伴い、SI135より古いことから9世紀後半頃とされる。

SI129については、床面から赤焼土器高台壺が出土していることから10世紀前半代に位置付けられ

る。

SI131は堆積土中にロクロ土師器甕が含まれており10世紀代には埋没していたものとみられるが詳細な時期は不明である。

SX139については、SI131より古いことから10世紀以前の遺構と捉えられる。

SI134はSI133より新しいことから9世紀後半代以降～10世紀前半に位置付けられる。

SX114はSI120より古く、掘り方埋土に底部の切り離しが回転糸切り無調整の須恵器甕を伴っていることから8世紀後半～9世紀後半の年代が考えられる。

SX103焼土遺構はSI129より新しいが堆積土中にロクロ調整された土師器以外の遺物が認められないことから10世紀前半以降とみられる。

SA122柱列、SB126・SB140掘立柱建物跡については時期を特定することはできなかった。このうちSA122は柱穴が隅丸方形・隅丸長方形を呈し掘り方も比較的大きなものである。西側に展開する建物の可能性もあり時期的にはSX114より新しく9世紀後半以降とみられる。SB126はⅡ区の中央部北よりの平坦面に建てられた2間×2間の総柱建物である。SA122とSB126は建物の方向が揃っており同時期の可能性もある。SB140は2間×1間の小規模な建物でSA122・SB126とは建物の方向が異なっておりSA122・SB126とは時期差があったものと思われる。これらの柱列、建物跡は、調査区内において中世の遺物がほとんどみられないことから堅穴住居跡と同時期の古代のものである可能性も考えられる。

古代の遺構の各時期の所属をまとめると次のようになる。



古代の遺構は8世紀中頃より後半頃のSI101とそれ以外は、9世紀後半から10世紀中頃のものとして捉えることができる。なおSX106焼土遺構、SA130柱列についてはその所属年代を明らかにしえなかつた。いずれも古代以降と考えるにとどめたい。

(2) 堅穴住居跡について

堅穴住居跡の属性について第1表にまとめた。これをみると、方向は東辺を基準とした場合南北方向より東に振れる(4°～23°)ものがほとんどであるが、SI129とSI134はやや西に振れている(2°～

住居	時期	方向	規 模 (東西×南北)	平面形	柱穴	カマド 有無	方向	側壁 構造	煙道 構造	窓 有無	床面 材質	床面 有無	備 考
SI101	4C中期～後半	N-?	E	8.3×4.0	正方形	4	北	○	○	○	○	○	○
SI100	9C後半	N-14°-E	2.7m×3.1	楕丸方形	0	○	所	○	×	○	○	○	2時間あり SI105・108・120と重複
SI120	9C後半	?	?	?	○	東	?	○	×	○	?	?	SI105・101と重複
SI110	9C後半	W-6°-N	4.5×5.0	長方形	4	○	北	○	○	○	○	○	SI105・105と重複
SI110	9C後半	N-9°-E	4.5×4.5	楕丸方形	0	○	東	○	○	○	○	○	○ 遺失TE? 早4時間
SI117	9C後半	N-12°-E	3.0m×3.2m	方形	2	○	東	○	○	○	○	○	?
SI130	1C中期～後半	N-2°-W	2.0m×1.6m	方形	2	○	東	○	○	○	○	○	?
SI135	1C中期～後半	N-4°-E	1.6m×2.1m	?	2	○	東	○	○	○	○	?	SI130・134と重複
SI102	10C後半	N-23°-E	0.5m	楕丸長方形	0	?	東	?	?	?	?	?	?
SI105	10C後半	N-4°-E	3.8m×4.8	長方形	4	○	東	○	○	○	○	○	SI101・108と重複
SI120	10C後半	N-4°-W	9.5×5.0	?	?	?	?	?	?	?	?	?	SI101・102と重複
SI130	9C～10C	N-23°-E	1.4m×3.2	不整形	?	?	?	?	?	?	?	?	SI109・SI130と重複

第1表 山居遺跡堅穴住居跡属性一覧

4°)。規模は一辺が4m前後になるものが大半を占めており、一辺が8mを超える大型のもの(SI101)、一辺が3m前後の小型のもの(SI108)も見られる。

平面形は方形・隅丸方形が主体を占め、長方形を呈するもの(SI105)、不整方形状を呈するもの(SI131)もある。床面は傾斜面に対して上方では地山を床面とするが下方は床面の傾斜を少なくするため埋め戻されており、掘り方埋土上面が床となっている。

主柱穴は、規模が一辺4~5m前後のSI105・SI133で、住居の対角線上に4箇所みられる。規模が一辺8mのSI101では6箇所と考えられる。住居によっては主柱穴をもたないもの(SI108・SI116・SI131)や、主柱穴以外に壁柱穴(SI101・SI105・SI133)、壁外柱穴(SI117)をもつものがある。

カマドはSI129・SI131以外のすべての住居で見つかっている。カマドの方向は9軒中6軒(SI105・SI116・SI117・SI120・SI134・SI135)が東向きの他、北向きが2軒(SI101・SI133)、南向きが1軒(SI108)で西向きのものは見られない。カマドの作り替えが確認できたものはなかった。カマドの構築法としては、地山を削り出しその後に礎を使用して構築しているもの(SI101・SI108)、礎を立て並べその後に構築土を使用しているもの(SI105・SI116)、構築土のみ使用しているもの(SI135)にわかる。SI117・SI133では住居の廐絶に伴い故意にカマドを壊した可能性が高い。SI108では住居の南辺より外側に地山を掘り込んでカマドがつくられている。住居の規模などから居住空間を確保する目的が考えられる。SI101・SI116・SI117・SI133・SI134・SI135は、カマド奥壁下の周溝が暗渠となっており、SI101・SI116では蓋石が検出されている。

煙道は外側に長く延びるもので地山をトンネル状に掘り抜いて構築しているものが多数を占める。ただしSI101では住居の規模に比して煙道がやや短いようである。SI105の煙道はSI101とSI108の堆積土を掘り下げて作られており、煙道の両側壁と天井に礎を使用し土師器甕の破片で隙間を塞いでいる。このような構造をもった煙道は、県内では県南部の蔵王町東山遺跡1号住居・4号住居(県教委1981)、同二屋敷遺跡5号住居(県教委1984)、同下原田遺跡3号住居・4号住居(県教委1981)、同赤鬼上遺跡1号住居(県教委1980)に類例がみられ、いずれも平安時代に属する。なお近県では岩手県北上市蛭川遺跡(北上市教委2002)、同岩崎台地遺跡群(岩手県埋文センター1995)で平安時代の堅穴住居跡に同様の構造をもった煙道が見られる。

周溝はSI120とSI131以外のすべての住居で検出されている。いずれも壁材痕は残っておらず、外延溝の検出されたものもなかった。SI101・SI105・SI116では床面上に溝が掘り込まれている。住居

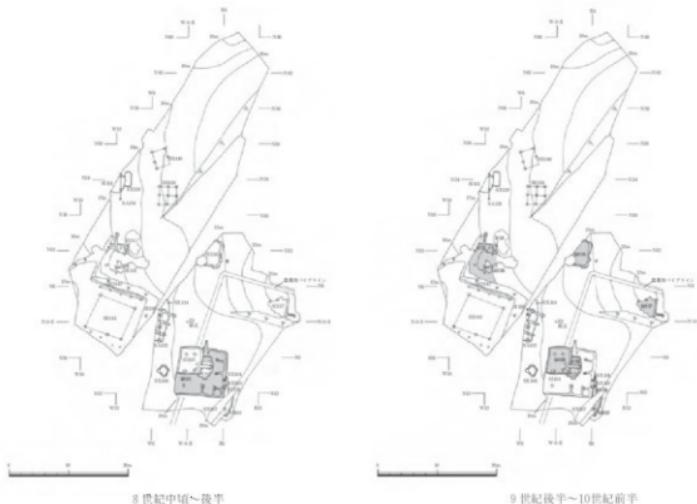
内の間仕切りに伴うものもしくは床面の排水に関連した機能が考えられる。貯蔵穴はすべてカマドの右側に作られている。SI116は住居の南東隅に張り出して貯蔵穴が掘り込まれている。

その他の特徴としてSI101は同位置・同規模での建て替えが行われ2時期にわたる住居であることが確認されている。SI116は床面上の堆積土に多量の焼土・炭化物が含まれていることや床面の遺物に被熱を受けているものが多数みられることから焼失住居の可能性が考えられる。

これらの住居跡は、北北東から南南西の方向に舌状に延びる丘陵上の主に南側緩斜面に分布している。また、住居の南北ラインも等高線にはほぼ平行な向きを示している。床面は丘陵の傾斜にあわせ地山削り出しと掘り方埋土とを組み合わせて作られている。カマドの構造では、カマド本体の構築に礫を使用するもの、カマド奥壁下に周溝の延びているものがみられる。周辺の河北町新田東遺跡、同沢田山西遺跡、桃生町角山遺跡、同太田窯跡（県教委2006）でも同様の構造をもったカマドが検出されている。このようなカマドを伴う住居については、北上川下流域の桃生郡内に分布する古代集落に共通する性格を示したものといえる。

(3) 各年代の集落の様相と特徴

これまでにやってきた遺物・遺構の検討から、山居遺跡の竪穴住居群は8世紀中頃から後半にかけてのものと9世紀後半から10世紀前半にかけての2群に分けて捉えられる。



第33図 各年代毎の竪穴住居跡の変遷 (1/800)

〔8世紀中頃～後半〕

SI101が当該期の住居である。この住居は一辺が8mにおよぶ大型のもので、同位置で一度建て替えられている。カマドの方向は北向きをとる。

調査区内では当該期の住居が他に発見されていないが、地形的にも丘陵部が調査地点より南へ大きく張り出していることを勘案すると、SI101が1軒だけ孤立した状態で存在していたとは考えにくく、本遺跡の立地するこの丘陵一帯に集落が営まれていた可能性は十分に考えられる。また、本遺跡の南方4～10kmの丘陵地では角山遺跡や沢田山西遺跡などにおいても本遺跡と同様、当該期の集落が確認されている。

SI101は、一辺が8mと他の住居より床面積が倍以上大きく（註4）、規模の点からみて集落内の中核的な住居となりうるものとして注目されるが（註5）、具体的な性格について特定できる材料はない。しかし、年代的にみて、近接する桃生城跡の造営期から廃絶期にほぼ併行する時期と考えられること、その後に桃生城跡が復興されていないこと、本遺跡も9世紀後半までの長い期間断続していることから、この集落は桃生城跡と密接な関係の下、計画的に形成された集落と捉え得る可能性も出てくる。今後とも周辺の丘陵地における調査の進展と資料の増加をまって検討を続けていきたい。

〔9世紀後半～10世紀前半頃〕

9世紀後半頃のSI108・SI116・SI117・SI120・SI133と10世紀前半頃のSI102・SI105・SI129が当該期の住居である他、SI134・SI135もこの時期に含まれる。住居の規模は、一辺が3m前後の小型のものと一辺3.6～5mの中型のものに分かれ、後者が主体を占める。カマドの方向は北向き、南向き、東向きに分かれ、東向きが主体を占める。住居の分布をみると、9世紀後半頃のものは調査区南半部の丘陵南斜面に集中する傾向があり、10世紀前半頃のものは調査区南端部周辺の標高17～19mの地点に偏在している。このうちSI105は、SI101およびSI108の堆積土を掘り直して構築されている。住居の廃絶によって生じた平坦面を利用するこのような住居のあり方は、前述の角山遺跡や沢田山西遺跡などでも多くみられており、丘陵部において平坦面に乏しい当地方の土地利用の特徴を示すものといえる。また、本遺跡の位置する桃生郡は、すでに律令制支配下に安定的に組み込まれていたと捉えられ、火山灰の降下にかかわらず集落は存続し得たものと考えられる。

V ま と め

1. 山居遺跡は、石巻市桃生町倉坪字山居に所在し、桃生町東部を南北に流れる北上川によって東西に分断された丘陵の南西部に位置している。調査地点の標高は15～23mである。
2. 発見された遺構は、竪穴住居跡12軒、竪穴遺構2軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、柱列2条、焼土遺構4基、ピット多数である。竪穴住居跡を中心とした遺構の大半は8世紀中頃～10世紀中頃のものと考えられる。
3. 出土した遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器の他、鉄鎌、鉄鎌、砥石、鐵滓、繩文土器、陶磁器がある。このうち土師器には非ロクロ調整とロクロ調整のものがあり後者が主体を占める。ロク

口調整の土師器甕には底部周縁を叩き出して成形しているものがある。これについては会津地方に特有の製作技法であることから、本遺跡と会津地方との間に律令制下での政策的な人的・物的交流のあった可能性が考えられる。

4. 主として竪穴住居跡で構成される集落は、8世紀中頃～後半頃と9世紀後半～10世紀前半頃に存続し、8世紀末～9世紀中頃には一時絶している。竪穴住居跡の規模は一辺が8mを超える大型のものや、3m前後の小型のものが含まれ、それぞれ集落内における住居の機能の違いを表したものといえる。大型の住居については河北町新田東遺跡においてほぼ同規模（東西8.8m×南北7.8m以上）のSI21竪穴住居跡が検出されており、桃生城跡の造営期に機能していたものと捉えられている。本遺跡における大型住居についても桃生城跡と併行する時期のものであることから、桃生城跡と何らかの関連をもっている可能性が高い。また住居のカマドには礫を使用して構築されるもの、カマド奥壁下に周溝の巡るものがみられ、これらは地域的なカマドの構造の特徴を示したものといえる。
5. 集落は、北上川下流域に分布する他の古代集落と同様、旧河道や後背湿地に沿った丘陵斜面に展開し、廃絶した住居の平坦面を利用して住居が新設されている箇所もみられる。この点に関しては、集落成立に際する当地域における土地の有効利用の有り方を反映したものと考えられる。
6. 出土遺物から集落は10世紀前半で廃絶したものとされる。近世に入ると、大規模な丘陵傾斜面の切土を伴う建物が現れるようになり、この地域での土地利用が再開されることになる。

註

註1 宮城県多賀城跡調査研究会（1991）『多賀城跡』第60・61次 PP.133～137

註2 表杉ノ入式期の土師器環の変遷については、県北部の状況を森賀寅（1983）：「佐内屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第93集 が、県南部の状況を丹羽茂（1983）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集 が詳細に論証している。

註3 底部周縁を叩き出して成形したクロコ土師器長胴甕は、北陸・日本海側系の長胴甕製作技法の影響の下に会津地方で普及していたものといわれている。山中雄志（1999・2000）「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相」『福島考古』40・41号 山中雄志（2003）

「古代会津地方の長胴甕にみる特質について」行政社会論集 第15巻 第3号 福島大学行政社会学会

註4 SI101の床面積が65.6㎡であるのに対して他の住居の床面積は概ね9～25㎡に収まるものと考えられる。

註5 高清水町経ヶ崎遺跡では8世紀後半に属する一辺10mの大型竪穴住居跡2軒を含む12軒の住居が検出されている。一般集落における大型住居の有り方を示すものとして興味深い。

註6 類似の状況は、新田東遺跡、角山遺跡、沢田山西遺跡、太田窯跡などでも確認されており、集落内における土地利用に共通性が見出しえ得る。

【引用・参考文献】

- 氏家和典（1957）「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14号 東北史学会
岡田茂弘・桑原道郎（1974）「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』
加藤道男（1989）「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
河南町教育委員会（1987）『領江櫛塚遺跡』河南町文化財調査報告書第1集
河南町教育委員会（1993）『領江窯跡群 代官山遺跡』河南町文化財調査報告書第6集
河南町教育委員会（1993）『開ノ人遺跡』河南町文化財調査報告書第7集
北上市教育委員会（2002）『蛭川遺跡』北上市埋蔵文化財調査報告書第51集

- 白鳥良一 (1980) 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』
- 綱峰町教育委員会 (1983) 『大境山遺跡』綱峰町文化財調査報告書第4集
- 仙台市教育委員会 (1987) 『五本松遺跡』仙台市文化財調査報告書第99集
- 仙台市教育委員会 (1995) 『仙台平野の遺跡群XIV』仙台市文化財調査報告書第195集
- 仙台市教育委員会 (1996) 『郡山遺跡XVI』仙台市文化財調査報告書第210集
- 高清水町教育委員会 (1999) 『絃・輪遺跡・觀音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第2集
- 多賀城市教育委員会 (1991) 『山王遺跡 第9次』多賀城市文化財調査報告書第26集
- 多賀城市教育委員会 (1995) 『高崎遺跡 第11次』多賀城市文化財調査報告書第37集
- 東北古代土器研究会 (2005) 『東北古代土器集成・古墳後期～奈良・集落編＜宮城＞』
- 宮城県教育委員会 (1978) 『難深遺跡』宮城県文化財発掘調査勘報(昭和52年度分)宮城県文化財調査報告書第53集
- 宮城県教育委員会 (1980) 『台ノ山遺跡』東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第62集
- 宮城県教育委員会 (1980) 『赤堀上遺跡・西手取遺跡・手取遺跡・佐野遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集
- 宮城県教育委員会 (1980) 『安久東遺跡・觀音沢遺跡』東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 (1981) 『清水遺跡』東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集
- 宮城県教育委員会 (1981) 『植田前遺跡・家老内遺跡・下原田遺跡・東山遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 (1982) 『御駒堂遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集
- 宮城県教育委員会 (1983) 『佐内内敷遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書VIII』宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会 (1984) 『二屋敷遺跡』宮城県文化財調査報告書第99集
- 宮城県教育委員会 (1984) 『鹿島遺跡 竹之内遺跡』宮城県文化財調査報告書第101集
- 宮城県教育委員会 (2001) 『沢田山西遺跡』宮城県文化財調査報告書第189集
- 宮城県教育委員会 (2003) 『新田東遺跡』宮城県文化財調査報告書第191集
- 宮城県教育委員会 (2004) 『沢田山西遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第196集
- 宮城県教育委員会 (2005) 『角山遺跡』宮城県文化財調査報告書第200集
- 宮城県多賀城跡調査研究所1991 『多賀城跡』第60・61次
- 宮城県多賀城跡調査研究所1997 『多賀城跡』第68次・多賀城碑
- 村田晃一 (1995) 『宮城郡における10世紀前後の土器群』『福島考古』36号
- 柳澤和明 (1995) 『多賀城周辺における10世紀前後の土器群』第1回岩手県古代土器の勉強会資料
- 矢本町教育委員会 (2001) 『赤井遺跡I－牡鹿櫛・郡家推定地－』矢本町文化財調査報告書第14集

1. 調査区東側全景
(北から)



2. 調査区東側全景
(南から)



3. 調査区西側全景
(南から)





1. SI105堅穴住居跡東西断面（南から）



2. SI105堅穴住居跡南北断面（西から）



3. SI105堅穴住居跡全景（西から）



4. SI105堅穴住居跡カマド土器出土状況（西から）



5. SI105堅穴住居跡カマド近接（西から）

図版2



1. SI105堅穴住居跡煙道蓋石検出状況（北から）



2. SI105堅穴住居跡煙道側壁検出状況（北から）



3. SI108堅穴住居跡全景（北から）

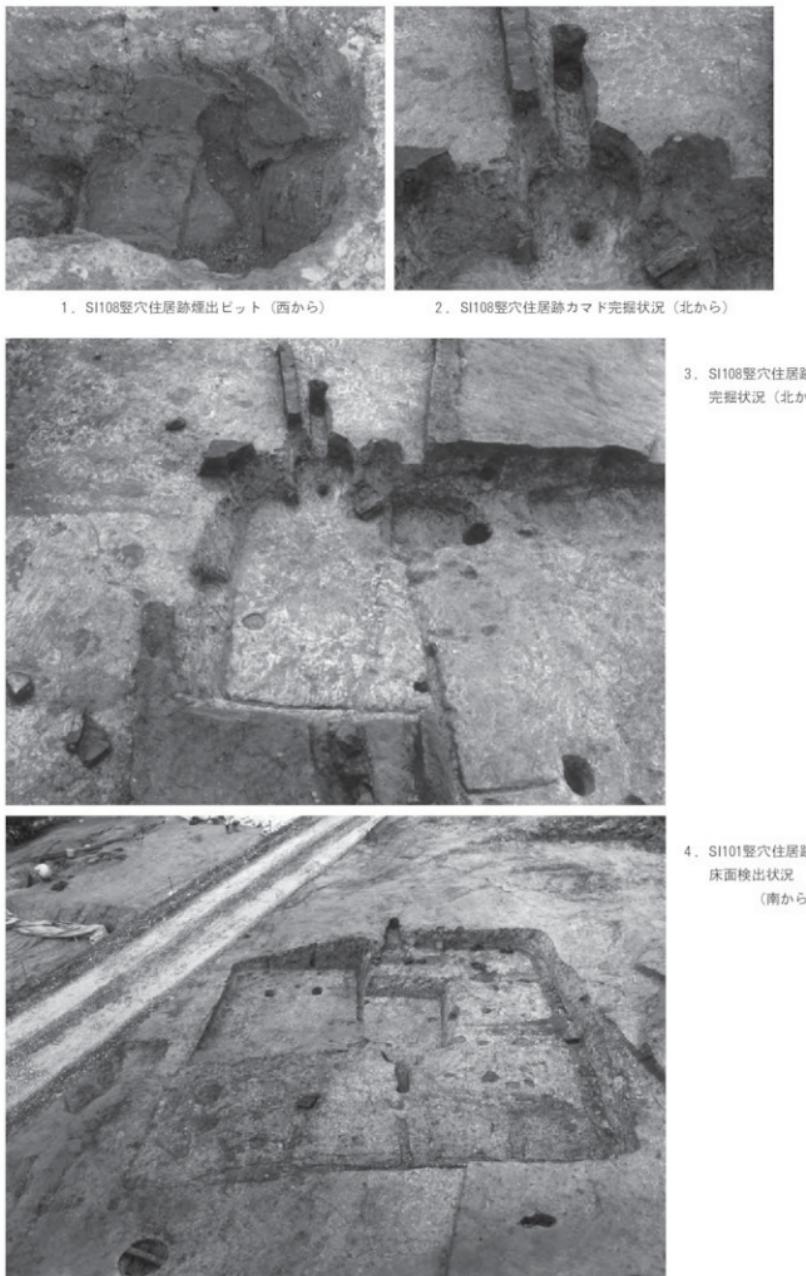


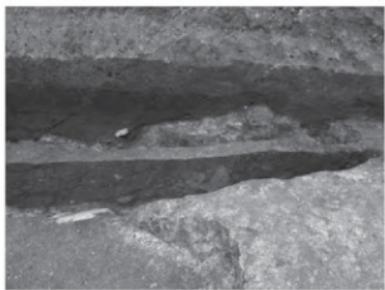
4. SI108堅穴住居跡カマド東西断面（北から）



5. SI108堅穴住居跡カマド南北断面（西から）

図版 3





1. SI101竪穴住居跡縦道南北断面（東から）



2. SI101竪穴住居跡カマド完掘状況（南から）



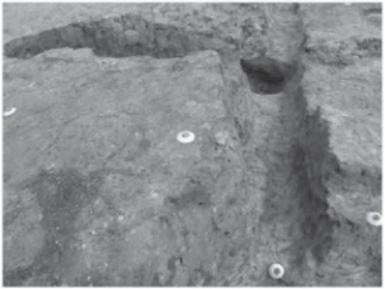
3. SI101竪穴住居跡カマド内周溝蓋石（南から）



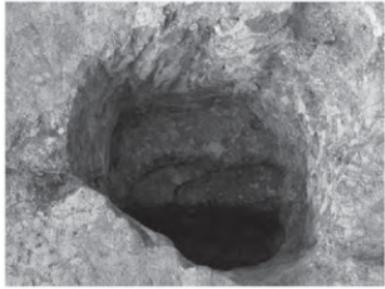
4. SI101竪穴住居跡カマド内周溝南北断面（西から）



5. SI101竪穴住居跡カマド内周溝完掘状況（南から）



6. SI101竪穴住居跡カマド内周溝完掘状況（西から）



7. SI101竪穴住居跡主柱穴P1東西断面（南から）



8. SI101竪穴住居跡主柱穴P2南北断面（西から）

図版5



1. SI101竪穴住居跡周溝・床面溝東西断面（南から）



2. SI101竪穴住居跡周溝東西断面（南から）



3. SI101竪穴住居跡
床面遺構完掘状況
(南から)



4. SI101竪穴住居跡掘り方完掘状況
(東から)

図版 6



1. SI116竪穴住居跡全景（西から）



2. SI116竪穴住居跡東西断面（南から）



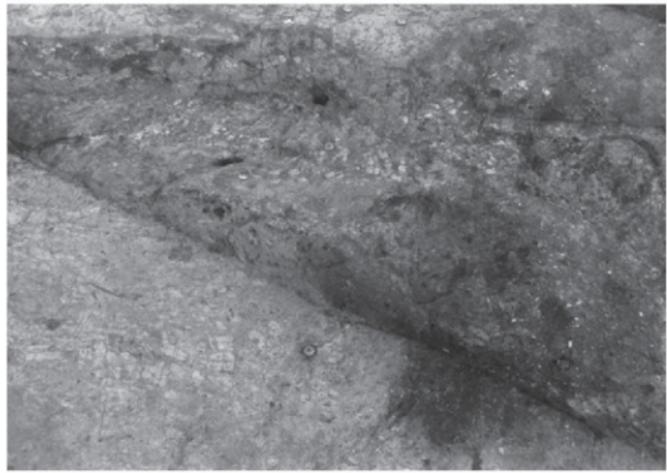
3. SI116竪穴住居跡カマド近接
(西から)



2. SI116竪穴住居跡煙道東西断面（南から）



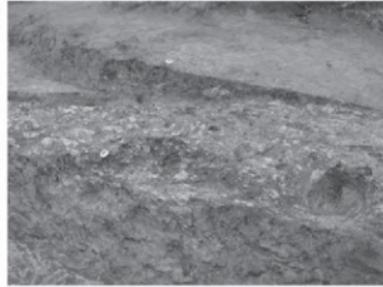
1. SI117竪穴住居跡全景
(西から)



2. SI102竪穴住居跡全景
(西から)



3. SI120竪穴住居跡全景（西から）



4. SI129竪穴住居跡全景（西から）

1. SI135竪穴住居跡全景
(西から)



2. SI133・SI134・SI135
竪穴住居跡全景
(西から)



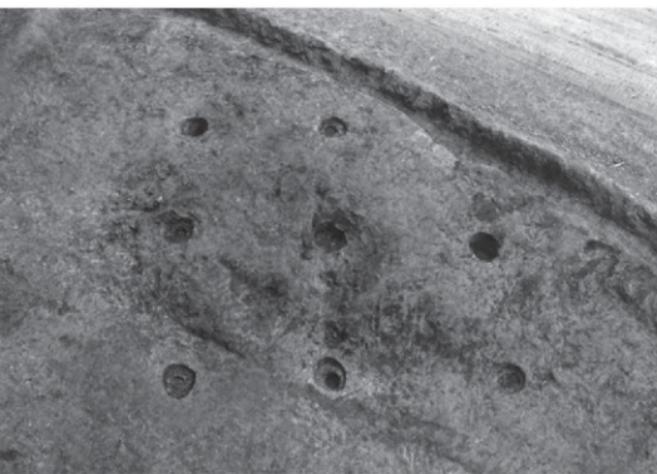
3. SI133竪穴住居跡全景
(南から)



1. SI131竪穴住跡全景
(南から)



2. SB126掘立柱建物跡全景
(西から)



3. SA122柱列全景
(西から)

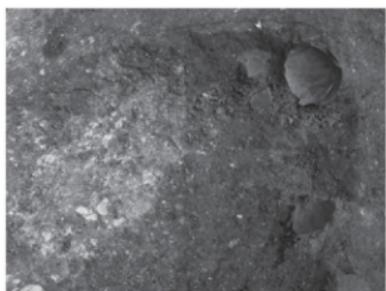




1. SX114竪穴遺構東西断面（南から）



2. SX139竪穴遺構全景（南から）



3. SX103焼土遺構全景（北から）



4. SX104焼土遺構東西断面（南から）



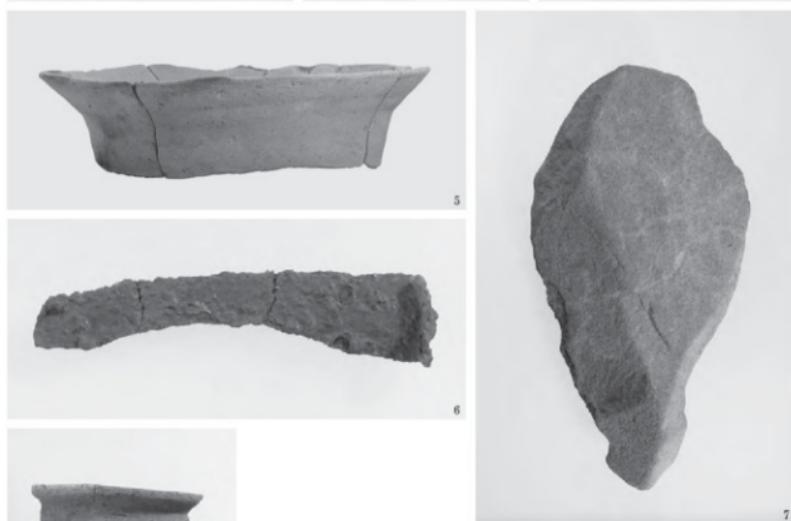
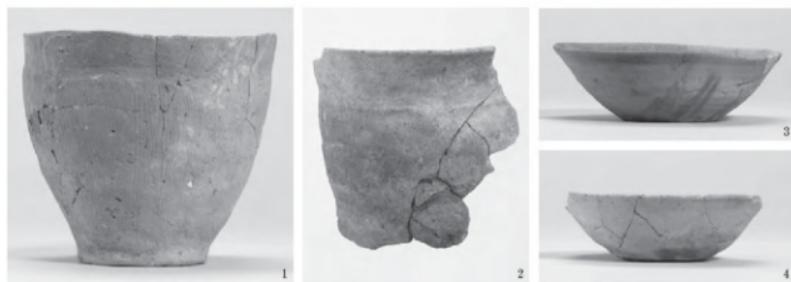
5. SX107焼土遺構全景（西から）



6. SX106焼土遺構全景（東から）



図版12 SI105竪穴住居跡出土遺物



1~7 : SI101

8 : SI108

- 1 : 土師器瓶 (縮尺1/3)
2・5・8 : 土師器攤 (縮尺1/3)
3 : 瓢狀器環 (縮尺1/3)
4 : 赤燒土器高台杯 (縮尺1/3)
6 : 鐵鏹 (縮尺1/2)
7 : 圓滑蓋石 (縮尺1/4)



1~7 : SI116
8~12 : SI117

1: 陶器壺
2~4・10: 陶器環
5: 陶器高台杯
6~9: 陶器壺
11・12: 陶器環

(縮尺=1/3)

図版14 SI116・SI117整穴住居跡出土土器



1~5 : SI102
6~17 : SI135

1・2・4 : 赤燒土器高台盤
3・15・16 : 素燒土器環
5 : 土師器甕
6・7 : 土師器高台環
8~12 : 土師器甕
13・14 : 瓢壺器環
17 : 赤燒土器高台環

(縮尺 = 1/3)

図版15 SI102・SI135整穴住居跡出土土器



1~3 : SI133
4 : SI131
5 : SI120
6 : SX104
7 : SX107

1 : 上師器坏 6 : 赤燒土器高台坏
2 : 須惠器甕 7 : 赤燒土器小型甕
3~5 : 上師器甕

(縮尺=1/3)

図版16 SI120・SI131・SI133竪穴住居跡・SX104・SX107焼土遺構出土土器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かどやまいせき・さんきょいせき							
書名	角山遺跡・山居遺跡							
副書名	三陸縦貫自動車道建設関連遺跡調査報告書VI							
卷次								
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第206集							
編著者名	農村幸宏・田中政幸							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目 8-1 TEL 022-211-3682							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
角山遺跡	宮城県石巻市桃生町太田字角山	市町村 042021	道路番号 70029	38度 33分 23秒	141度 16分 20秒	確認： 2004.11.20 ～2004.11.23 事前： 2005.04.23 ～2005.05.09	1,400 m ²	三陸縦貫自動車道建設に伴う事前調査
山居遺跡	宮城県石巻市桃生町倉岸字山居	042021	70033	38度 35分 11秒	141度 16分 51秒	2005.06.27 ～2005.10.20	II区 1,300 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
角山遺跡	集落跡	奈良・平安	堅穴住居跡1軒、焼土遺構2基、ピット		土師器・須恵器	奈良時代(8世紀後葉)から平安時代(9世紀初め)の住居跡		
山居遺跡	集落跡	奈良・平安 近世	堅穴住居跡12軒、堅穴遺構2軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡1条、柱列2条、焼土遺構4基 ピット多数		繩文土器・土師器・須恵器・赤焼土器・陶磁器・鉄鎌・鉄鏟・鐵鋤・鐵滓・砥石など	奈良時代(8世紀中期～後半)から平安時代(9世紀後半～10世紀前半)の集落跡・江戸時代以降の建物跡		